

青年期の自我強度と共感性との関連にもとづく 心理療法導入に関する交流手段

The methods of communication concerning introducing psychotherapy on the basis
of the relationship between ego strength and empathy during adolescence

長尾 博

NAGAO, Hiroshi

要旨

本研究の目的は、青年期の自我強度と共感性との関係についての結果にもとづき、心理療法へ導入する交渉手段について明らかにするものである。研究Ⅰでは、自我強度尺度（長尾，2007）と多次元共感性尺度（鈴木・木野，2008）を105名の中学生，130名の高校生，178名の大学生に実施した。その結果，（1）男子学生は，女子中学生よりも自我が強いことが示され，共感性については，女子の方が男子よりも高いことが示された。（2）男子中学生の特性として防衛的でかたくなであること，女子高校生の特性として交友関係で積極的な傾向があることが，2つの尺度の下位尺度の相関係数からとらえられた。研究Ⅱでは，研究Ⅰで明らかにされた心理特性をもとに心理療法の抵抗の分類と心理療法導入におけるさまざまな交流手段を提案した。研究Ⅱによって言語交流のみならず，描画，ゲーム，箱庭など間接的な交流手段がラポール形成に有効であることが示唆された。

Abstract

The purpose of this study was to investigate the methods of communication concerning introducing psychotherapy on the basis of the relationship between ego strength and empathy during adolescence. In study I, ego strength scale (Nagao, 2007) and multidimensional empathy scale (Suzuki & Kino, 2008) were administered to 105 junior high school students, 130 senior high school students, and 178 university students. The main results were as follow; (1) Male junior high school students showed higher scores of ego strength scale than female junior high school students, however, female students showed higher scores of multidimensional empathy scale than male students. (2) Male junior high school students' defensive and rigid ego and female senior high school students' tendency toward positive relations were found on the basis of significant correlations between subscales' scores of two scales. In study II, the resistance of psychotherapy was classified and the various methods of communication concerning introducing psychotherapy according the adolescent mentality of study I and the latest case studies were presented. It suggested that not only verbal communication but also indirective methods, i.e. drawing, playing games and sand play would be effective on forming rapport with adolescent

clients.

Keywords

adolescence; methods of communication; ego strength; empathy; introducing psychotherapy

〔問題と目的〕

本研究は、青年期の自我強度 (ego strength) と共感性 (empathy) との関係の結果にもとづいて心理療法導入における交流手段を明らかにするものである。

一般に心理療法は、治療者とクライアントとで心理療法を行う同意や約束、つまりインフォームドコンセントのもとで行うものであるが、青年期クライアントに対してはインフォームドコンセント以前にその導入が困難であることは従来から指摘されている (長尾, 1986 ; 遠山ら, 1984)。とくに木村ら (2017) は、心理療法導入が困難である原因として、治療者が、クライアントの心理が「わからない」点をあげている。心理療法において、治療者がクライアントの心理が「わかる」ことが重要であることはいままでもない (土居, 1992 ; 成田, 2003)。

小此木 (1976) は、青年期心理療法においてクライアントの心理が「わかる」パラメーターとして、クライアントの病理 (pathology) と年齢 (学年, あるいは学校段階差) をあげており、長尾 (2016) は、性差をあげている。また、河合 (1982) は、心理療法の導入が困難な原因として、クライアント側の心理療法の動機づけの欠如や問題意識の曖昧さ、及びことばで表現できない難しさをあげている。

このように青年期心理療法においてその導入が困難な原因は、治療者側とクライアント側の2つがあることがわかる。そこで治療者が、クライアントの心理が「わかる」ためにどのような視点を重視してクライアントを見ているのか、つまり重視されている治療的視点から青年心理特性を明らかにし、その青年心理特性にもとづいて実際の心理療法においてこれまで心理療法導入が困難なケースに対してどのように関わってきたのかを整理していく必要があるととらえた。

まず、治療者側のクライアントをとらえる視点として、わが国の臨床心理士が心理療法で用いる技法についての調査結果では、精神分析・分析心理学的アプローチが 42.4%, 人間性心理学的アプローチが 51.3%, 行動療法・認知行動療法的アプローチが 39.7%, そして折衷的アプローチが 73.7%であるという報告があり (日本臨床心理士会, 2006), 精神分析的アプローチと人間性心理学的アプローチを行う者が多いことがわかる。前者は、クライアントの自我強度 (Freud, 1916) が、後者は、治療者の共感性 (Rogers, 1957) が心理療法において重視している治療者側の視点である。自我強度と共感性の2つの視点が重要であることから、筆者は、対象となる青年期クライアントの自我強度と共感性とが関連をもつ学年や性を明らかにしていくことは、治療者側が、青年期クライアントの心理をより深く「わかる」ことにつながり、それが心理療法の円滑な導入につながるのではないかととらえた。

そこで健常青年を対象に青年期において自我強度と共感性が関連をもつ性と学年を明らかにすることにした。

次に自我強度と共感性が関連をもって発達していく性と学年の結果にもとづいて、その

性と学年に絞ってこれまでの臨床実践でどのようにして心理療法へ導入してきたかを今日までの主な臨床心理学の研究報告をもとに明らかにしていくことにした。本研究では、便宜上、研究Ⅰと研究Ⅱに分けた。

[研究Ⅰ]

1. 目的

青年期において自我強度と共感性が関連をもつ性と学年を明らかにする。

2. 方法

1) 調査対象

九州圏のA県の公立中学2年生105名(男子53名と女子52名)、公立高校普通科2年生58名(男子29名と女子29名)、国立大学教育学部2年生男子39名、私立女子大学文学部2年生51名、B県の私立高校普通科3年生72名(男子38名と女子34名)、私立大学工学部1年生88名(男子81名と女子7名)。合計;中学生105名(男子53名と女子52名)、高校生130名(男子67名と女子63名)、大学生178名(男子120名と女子58名)。

2) 調査時期・手続き

A県の公立中学校、公立高校、国立大学、私立大学の生徒・学生へは2012年10月にB県の私立高校、私立大学の生徒・学生へは2015年10月に訪問して一斉に実施した。

3) 測定尺度

(1) 自我強度をみるために信頼性と妥当性のある長尾(2007)の「自我強度尺度」を用いた。この尺度は、「私は我慢強いほうである」など対自的な質問項目で作成され、合計得点でその程度をとらえることになっている。中学生用(26項目)と高校・大学生用(24項目)とがあり、中学生用は「欲求不満耐久度」、「観察自我の芽生え」、「現実感覚の芽生え」、「柔軟な自己」の4つの下位尺度で構成されている。高校・大学生用は「欲求不満耐久度」、「自我同一性の確立」、「適応的自己」、「現実的自己」の4つの下位尺度で構成されている。回答は3件法で「はい」を3点、「いいえ」を1点、「わからない」を2点と採点し、得点が高いほど自我が強いととらえる。各下位尺度得点間のピアソンの相関係数は、中学生用が、全て.20以上($p < .05$, $n=94$)、高校・大学生用が、全て.11以上($p < .05$, $n=302$)であった(長尾, 2007)。

(2) 共感性の程度をみるために信頼性と妥当性のある鈴木・木野(2008)の「多次元共感性尺度」を用いた。この尺度は、「私は、相手の立場に立ってとらえる」など対他的な質問項目で作成され、24項目からなり、合計得点でその程度をとらえることになっている。「被影響性」、「他者指向的反応」、「想像性」、「視点取得」、「自己指向的反応」の5つの下位尺度で構成されており、回答は5件法で「非常にそう思う」の5点から「全くそう思わない」の1点までで採点し、得点が高いほど共感性が高いととらえる。各下位尺度得点間のピアソンの相関係数は、視点取得と想像性との相関係数を除いて、全て.11以上($p < .05$, $n=347$)であった(鈴木・木野, 2008)。

4) 倫理的配慮

回答は無記名とし、回答は任意であり、回答の中止や拒否の権利があることを調査対象に伝え、同意を文章で得て調査を実施した。

3. 結果と考察

1) 学校段階差と性差

Table1 に2つの尺度の学校段階・性別の平均値と2つの尺度の学校段階差や性差をみるために高校・大学生は、2（学校段階）×2（性）の分散分析の結果を、中学生は、高校・大学生用尺度とは異なるため、性差の平均値の差の検定結果を示した。

Table1 より、中学生の自己強度は、男子のほうが女子よりも強いことが示された。この結果は、長尾（2007）の結果と照合した。また、高校生と大学生は、学校段階差や性差もないことが示された。この結果も長尾（2007）の結果と照合した。

多次元共感性については、学校段階差と性差の交互作用があり、学校段階差の主効果も性差の主効果もみられた。学校段階差については、Ryan の多重比較の結果、大学生のほうが中学生よりも高く ($p < .05$)、性差については、女子のほうが男子よりも高いことが示された ($p < .01$)。この結果は、学校段階差については石川・内山（2002）の結果と照合し、性差については鈴木・木野（2008）の大学生の結果や Hoffman（1975）の幼児期から成人期までの結果と照合した。

2) 自己強度と共感性との関係

学校段階・性別の自己強度と共感性との関係をみるために学校段階・性別に自己強度尺度と多次元共感性尺度との得点のピアソンの相関係数を算出した。

Table2 に学校段階・性別の「自己強度尺度」の合計得点と「多次元共感性尺度」の合計得点との相関係数を示した。

Table2 より、学校段階や性差に関わらず、自己強度と共感性とは強い関連がないことが示された。この結果は、自己強度は対自的な要因であり、共感性は対他的な要因であることから合計得点間では関連がないことがとらえられた。しかし、2つの尺度は、それぞれ下位尺度で構成されていることから学校段階・性別に2つの各下位尺度得点間のピアソンの相関係数をみてその関連内容から青年期の心理特性をとらえてみることにした。

Table3 は、中学生の場合の2つの下位尺度得点間の相関係数である。

南風原・芝（1987）は、相関係数を解釈していく場合、とくに1%の有意水準を取り上げて関連をみていくことを重視している。この点を参考にして1%の有意水準の相関係数をみていくと、中学生男子の場合、「想像性」と「柔軟な自己」とに負の相関があることがわかる。この相関の意味として、「柔軟な自己」がないほど、つまり考えが頑固であるほど「想像性」、つまり自分の経験や他者との関係のイメージが豊かではないことを意味しており、このことから、中学生男子の自己防衛的でかたくなな態度が心理特性としてとらえられた。落合・佐藤（1996）の小学生から大学生までの交友関係に関する研究でも中学生男子は「自己防衛的なつきあい方」が特徴としてあげられている。

Table4 は、高校生の場合の相関係数をまとめたものである。

Table4 で1%の有意水準の相関係数を示すものは、高校生女子の場合の「現実的自己」と「他者指向的反応」との正の相関と、「現実的自己」と「自己指向的反応」との負の相関である。この2つの相関の意味として、高校生女子の日常生活では、「現実自己」の高まりは、つ

まり自己意識が外界に開いた意識になるほど「他者志向的反応」、つまり他者に対して今まで以上に関心を示し、「自己志向的反応」、つまり自分のことだけを気にすることが減っていくことを意味しており、このことから、高校生女子の他者を積極的に理解しようとするのが心理特性としてとらえられた。落合・佐藤（1996）の交友関係の研究でも高校生時が交友関係の転換期であることが示されており、和田（1993）の研究では、女子のほうが男子よりも自己開示し、相互依存する同性の交友関係を示しやすいという結果が明らかにされている。

Table5 は、大学生の場合の相関係数をまとめたものである。**Table5** から、大学生の場合、1%の有意水準の相関係数はないことがわかった。

以上の健常中学・高校・大学生の自我強度と多次元共感性との下位尺度得点間の相関係数から、中学生男子のもつ防衛的でかたくなな心理特性と高校生女子のもつ積極的に他者を理解しようとする心理特性が明らかになった。そこで研究Ⅰで自我強度と共感性の関連が明らかになった中学生男子と高校生女子に絞って、研究Ⅱでは実際の臨床実践で中学生男子と高校生女子のケースでは、どのような心理療法の抵抗（resistance）があるのか、どのような交流手段によって心理療法へ導入しているのかを代表的な臨床心理学雑誌で報告されているケースにもとづいて整理してみることにした。

[研究Ⅱ]

1. 目的

研究Ⅰの結果にもとづき中学生男子と高校生女子の心理療法導入での適切な交流手段を明らかにする。

2. 方法

筆者の45年間の臨床経験と1985年から2015年までの「カウンセリング研究」、及び「心理臨床学研究」に記載されている中学生男子と高校生女子を対象としたケース研究をもとに心理療法の抵抗の種類や心理療法への導入手段を明らかにする。調査時期は、2017年の10月に調査を行った。

3. 結果と考察

研究Ⅱで収集したケース研究は、中学男子が14ケースで高校女子が9ケースであった。これらのケースは、研究Ⅰで明らかにされたように中学生男子は、かたくなな防衛的態度が、高校生女子は、交友関係が問題の中心であった。

Horney（1951）は、神経症（neurosis）の研究で神経症の基本的対人態度（basic interpersonal attitude）として、依存（toward people）、攻撃（against people）、孤立（away from people）の3つのタイプをあげている。この3つの分類を参考にして、中学男子と高校女子の23ケースの心理療法の抵抗の種類を、問題に対して親和的で治療者任せで「依存」するタイプ、問題に対して自我親和的、また、問題を親や教師などの大人のせいにして反抗し、「攻撃」するタイプ、そして問題を回避して孤立していく者や問題意識の欠如した「回避」タイプの3つに分けて、**Table6** に示した。

Table6 で中学生男子の場合、かたくなな防衛的態度は、具体的には、（1）無気力、ある

いは不安を感じない状態が主で問題意識がない、(2) 親子関係や交友関係の問題を心理療法場面でふれてほしくないという現実逃避、(3) 成人(大人)である治療者への青年期的反抗、(4) 問題そのもの(非行や長期のひきこもり)に自我親和的でそれを解決したくないことの4点の心理療法への導入の抵抗が現われやすいことがとらえられた。

また、高校生女子の場合、交友関係で他者を積極的に理解しようとする心理特性と関連した抵抗は、具体的には、(1) 交友関係で他者へ接近し過ぎて、傷ついたことから自分の問題を回避したり、(2) 交友関係の問題は、成人(大人)である治療者にはわからないという反抗を示したり、(3) 非行グループだけが自分にとっての所属集団であり、自らのもつ問題が親和的な集団の所属チケットである、(4) (2)に類似するが、過去に経験した心理療法経験で傷つき、今度の治療者も同様な人物とみていることの4点で現われやすいことがとらえられた。さらに **Table6** に収集した 23 のケースで記載されている心理療法の導入への抵抗の対応法について、一般論ではあるが、表 6 の (1) に記載されているケースの考察をまとめて 7 つの点をあげた。このような一般論よりも、むしろどのようなケースでも青年期クライアントに対して個別にラポールを深めていく方法を明らかにしていくことのほうが治療者の臨床的力量を高めるととらえて、問題(症状)という心理現象に即した心理療法への抵抗を緩和していく交流手段について明らかにしてみた。

Table7 は、**Table6** の抵抗の分類にもとづき、現象学的観点である Brentano (1874) のいう心理現象をありのままに分類する視点や Husserl (1913) のいう「事象そのものへ」(Zu den Sachen selbst) 態度から、クライアントは、今、何を気にしているか、何に関心があるかという「意識の志向性」(intentionality of consciousness) をみていき、23 ケースの「問題」(症状)をそのまま記述し、それに対してどのような交流手段をとったかをまとめて示した。

Table7 から、中学生男子の場合、親面接も加えるかどうかの問題もあるが、中学生男子とゲーム(オセロ、パソコンやスマホのゲームなど)→描画(自由画、スクイグル、風景構成法)→箱庭という展開が理想的であることがとらえられる。また、訪問面接の場合、岩倉(2003)も述べているように母親面接を行い、訪問面接の了承を得て行うことが望ましいと思われる。また、チックや強迫症状の場合、夢を介した精神内界からのアプローチと認知行動療法のような行動を介した2つのアプローチがあることがわかる。また、身体症状(吐き気、腰痛、過呼吸など)を示すケースは、症状を治療者が十分、受容し、症状の心理的意味をとらえることをねらって描画や箱庭などを通した関わりが抵抗が少なく、望ましいと思われる。

一方、高校生女子の場合、進路相談などの現実的なアプローチから、問題意識が欠如したケースに対して、精神内界を象徴的に表現する箱庭療法までの交流手段の幅がある。とくに離人症や解離などの精神症状に対しては、身体感覚や夢などのことば以外の交流手段のほうが、ことばよりも抵抗がなく、より円滑な方法ととらえられる。また、希死念慮をもつクライアントに対しては、自殺防止という観点から、病院での外来通院や入院という医療機関と連携した交流手段が重要であることがとらえられる。

また、シンナー依存や暴力、盗みなどの非行ケースや長期のひきこもりケースのような自我親和的な問題の場合、彼らのもつ興味や関心事(スポーツ、芸能、テレビ、ファッションなど)の話題から始めて、治療者が、今までとは違う人物(new object)として関われるかが重要であると思われる(長尾, 1984)。また、過去の心理療法経験の失敗による導入抵抗のあ

る場合は、過去の経験で傷ついた点を明らかにし、クライアントが望む心理療法の目標について時間をかけて話し合う必要があると思われる。

最後に心理療法導入において治療者側が、クライアントの心理を正確に理解し、受容していく以外に留意すべき点は多くある。とくに村井・岩壁・杉岡（2013）による初回面接での中断ケースの質的分析から治療者側のクライアントの内面に入れない、あるいはあきらめが先に立つなど消極的姿勢が中断をまねきやすいことや、また、吉良（1994）は、心理療法において治療者が「間を置く」（clearing a space）ことが心理療法の導入において必要なことが指摘されていることから、治療者の積極性や心の余裕が重要であると思われる。

〔総合的考察〕

本研究では、青年期心理療法の導入の困難さに着目し、その原因は、治療者側が、青年期クライアントの心理特性が「わからない」点にあるという観点から、研究Ⅰでは、健常中学・高校・大学の生徒・学生を対象に心理療法で強調されている自我強度と共感性の発達と双方の関連を明らかにした。その結果、双方の下位尺度得点の相関から中学生男子の「防衛的でかたくなな態度」と高校生女子の「交友関係で他者を理解しようとする態度」が明らかにされた。

研究Ⅱでは、研究Ⅰで明らかにされた中学生男子と高校生女子の心理特性にもとづいて研究雑誌のケース記述をもとに心理療法の抵抗の種類を Horney の基本的対人態度の分類法を参考にして分類した結果、（１）問題（症状）に自我親和的で治療者任せ、（２）大人への反抗、（３）問題（症状）からの回避の３つに大別できた。この３つのタイプをもとに問題（症状）を現象学的観点から分類し、この分類に即して治療者との交流手段を明らかにした。その結果、言語交流のみならず、描画、ゲーム、箱庭などの間接的な交流手段がラポール形成に有効であることが明らかにされた。しかしながら本研究の問題点は数多くあり、例えば、

（１）研究Ⅰにおいても研究Ⅱにおいても一般化して取り上げるには調査対象数やケース数が少ないことや各学校の環境差についてふれていないこと、（２）中学生男子と高校生女子の心理特性が明らかにされたものの、中学生女子、高校生男子、及び大学生男女の心理特性が明らかにされていない、（３）心理療法の抵抗について３つに分類しているが、臨床的に重要な青年期クライアントがもつ「治療者と関わりたいけど関われない」という両価感情（ambivalence）についてが取り上げられていない、（４）青年期の心の問題（症状）は、時代とともに変化しやすく、Table7 には、最近、注目されているリストカット症候群やうつ状態・うつ病が取り上げられていないなどがあげられる。この点を今後は、検討していきたいと思う。

付記

本研究の調査にご協力いただいた中学校、高校、大学の教員方々、生徒、学生の皆さんに深謝いたします。

引用文献

青戸泰子・田上不二夫(2015)．他者とのポジティブな関係と不登校生徒の自己イメージの変

- 容との関連 カウンセリング研究, **38**, 406-415.
- 荒木史代(2010). 中途退学後に単位制高校に入学した女子生徒とのスクールカウンセリング
カウンセリング研究, **43**, 257-266.
- Brentano, F. (1874). *Psychologie vom emirischen Standpunkt*. Hamburg;Meiner.
- 土居健郎(1992). 新訂 方法としての面接 医学書院
- Freud, S. (1916). *Vorlesungen der Einfuhrung in die Psychoanalyse*. Frankfurt;Fischer
Verlag. (フロイド, S. 井村恒郎・馬場謙一(訳)(1970). 精神分析 上・下 フロイド選
集 1・2 日本教文社)
- 藤田博康(2009). スクールカウンセリング実践において個人療法と家族療法をつなぐもの
心理臨床学研究, **27**, 385-396.
- 藤原小百合・増田梨花・橋口英俊(2004). いじめより不登校になった中学3年男子の事例 カ
ウンセリング研究, **37**, 345-351.
- 南風原朝和・芝 祐順(1987). 相関係数および平均値差の解釈のための確率的な指標 教育
心理学研究, **35**, 259-265.
- 東 知幸(2001). 引きこもりがちの不登校生徒に対するメンタルフレンドによるアプローチ
心理臨床学研究, **19**, 290-300.
- 人見健太郎・加藤直子(2009). 心理療法過程において治療構造が揺さぶられることについて
の一考察 心理臨床学研究, **27**, 420-431.
- Hoffman, M. L. (1975). Development synthesis of affect and cognition and it' s
implications for altruistic motivation. *Developmental Psychology*, **11**, 607-622.
- Horney, K. (1951). *Neurosis and human growth*. New York; W. W. Norton. (ホルネ
イ, K. 我妻洋・安田一郎(訳)(1998). 神経症と人間の成長 誠信書房)
- Husserl, E. G. A. (1913). *Ideen zu einer reinen Phonomenologie und Phonomenologischen*.
Hale; Philosophie. (フッサール, E. G. A. 池上謙三(訳)(1939). 純粹現象学及現象学的
哲学考案 岩波書店)
- 石川隆行・内山伊知郎(2002). 青年期の罪悪感と共感性および役割取得能力の関連 発達心
理学研究, **13**, 12-19.
- 岩倉 拓(2003). スクールカウンセラーの訪問相談 心理臨床学研究, **20**, 568-579.
- 河合隼雄(1982). 序論 箱庭療法の発展 河合隼雄・山中康裕(編) 箱庭療法研究 I 誠信
書房 pp. 7-18.
- 木村大樹・桑本佳代子・岡村裕美子・松野翔平(2017). 初学者の経験から考える心理療法の
導入について(2) 京都大学臨床教育実践研究センター紀要, **20**, 63-74.
- 吉良安之(1994). 自責的なクライアントに笑みを生み出すことの意義 心理臨床学研究, **11**,
201-211.
- 小泉隆平(2010). 復讐心を淡々と語る男子中学生との面接過程 心理臨床学研究, **28**, 467-
478.
- 三宅 永(1991). ヒステリーとてんかんの関連性の再考を促した一事例の箱庭療法 心理
臨床学研究, **16**, 592-603.
- 森平准次(2015). クライエントの現実感へのカウンセラーの影響 カウンセリング研究, **48**,
32-41.

- 村井亮介・岩壁 茂・杉岡晶子 (2013) . 初回面接における訓練セラピストの困難とその対応 心理臨床学研究, **31**, 141-151.
- 長尾 博 (1984) . 治療的動機づけの希薄な青年期クライアントに対する導入の実際 相談学研究, **16**, 87-96.
- 長尾 博 (1986) . 初回面接から導入へ 前田重治 (編) カウンセリング入門 有斐閣 pp. 144-146.
- 長尾 博 (2007) . 自我強度尺度作成の試み 心理臨床学研究, **25**, 96-101.
- 長尾 博 (2016) . 女ごころの発達臨床心理学 福村出版
- 中山英和 (2014) . クライエントの体験変容におけるクライエント自身の身体感覚が果たす機能に関する一考察 心理臨床学研究, **32**, 28-38.
- 成田善弘 (2003) . 精神療法家の仕事 金剛出版
- 日本臨床心理士会 (2006) . 臨床心理士の動向ならびに意識調査報告書 17
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) . 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 小此木啓吾 (1976) . 青年期精神療法の基本問題 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦 (編) 青年の精神病理 弘文堂 pp. 239-294.
- Rogers, C.R. (1957) . The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 95-102.
- 佐々木英則 (2009) . 攻撃的な中3男子との面接過程 心理臨床学研究, **27**, 344-355.
- 篠原恵美 (2012) . 青年期女子のアイデンティティ確立過程における青年・両親関係の発展 心理臨床学研究, **30**, 331-343.
- 塩本毅明 (2011) . 自閉症の中学生男子に対する描画を用いた訪問面接 心理臨床学研究, **29**, 465-475.
- 末木 新・梅垣佑介 (2013) . 子どもの強迫障害に対する曝露反応妨害法の実施における動機づけの高め方 心理臨床学研究, **30**, 785-795.
- 鈴木晶子 (2008) . 過呼吸症候群を契機に来院した思春期男子の箱庭療法 心理臨床学研究, **26**, 477-487.
- 鈴木有美・木野和代 (2008) . 多次元共感性尺度の作成 教育心理学研究, **56**, 487-497.
- 田畑洋子 (1985) . お前は誰だの答えを求めて 心理臨床学研究, **2**, 8-19.
- 田熊友紀子 (2002) . 離人症状をもつ青年期女性の心理療法過程 心理臨床学研究, **20**, 348-359.
- 竹田伸也 (2006) . 不登校中学生に対する認知行動療法を用いた自律的行動の形成 心理臨床学研究, **24**, 323-334.
- 竹松志乃 (1994) . チック・強迫症状を呈した中学生男子の事例 心理臨床学研究, **12**, 229-240.
- 谷野幸子 (1991) . 腰痛を訴える一少年の心理療法過程 心理臨床学研究, **9**, 38-50.
- 富樫公一 (2000) . 自己喪失・自己断片化を伴う境界例の事例における交換日記の利用 心理臨床学研究, **18**, 81-92.
- 遠山尚孝・佐野直哉・児玉憲一・園田順一・西村洲衛男 (1993) . 治療導入期における諸問題 心理臨床学研究, **2**, 44-66.

和田 実 (1993) . 同性友人関係 社会心理学研究, **8**, 67-75.

脇野満寿美 (1997) . 吐き気を訴える思春期男子との面接過程 心理臨床学研究, **15**, 394-405.

Table1 2つの尺度の学校段階・性別の平均値と学校段階差と性差の検定

学校段階・性	自我強度尺度	学校段階差と性差の検定
中学生男子	56.10(6.85)	(中学生の性差) $\chi^2(104)=2.57^*$ (高校生と大学生) ・学校段階差と性差の交互作用 $F(3,308)=1.45$ ・学校段階差の主効果 $F(1,308)=2.99$ ・性差の主効果 $F(1,308)=1.01$
中学生女子	53.66(6.92)	
高校生男子	52.43(5.01)	
高校生女子	52.10(4.88)	
大学生男子	53.00(7.64)	
大学生女子	52.58(7.02)	
学校段階・性	多次元共感性尺度	学校段階差と性差の検定
中学生男子	80.63(6.23)	(中学・高校・大学生) ・学校段階差と性差の交互作用 $F(3,366)=6.73^{**}$ ・学校段階差の主効果 $F(1,366)=3.90^{**}$ ・性差の主効果 $F(1,366)=11.48^{**}$
中学生女子	88.03(5.11)	
高校生男子	83.27(5.61)	
高校生女子	89.33(3.00)	
大学生男子	86.54(5.74)	
大学生女子	88.01(5.00)	

()は標準偏差値を示す * $p<.05$ ** $p<.01$

Table2 学校段階・性別の自我強度尺度合計得点と多次元共感性尺度合計得点との相関係数

学校段階・性別	相関係数
中学生男子 $n=53$.07
中学生女子 $n=52$.10
高校生男子 $n=67$.12
高校生女子 $n=63$.11
大学生男子 $n=120$.08
大学生女子 $n=58$.16
全 体 $n=413$.10

Table3 自我強度尺度と多次元共感性尺度の相関係数 (中学生)

自我強度	多次元共感性				
	被影響性	他者指向的反応	想像性	視点取得	自己指向的反応
欲求不満耐久度	.04	.20	-.20	.06	-.20
	-.01	.25	.04	.03	.14
観察自我の芽生え	-.24 *	.09	-.20	.04	-.15
	-.23 *	.01	.08	.06	.20
現実感の芽生え	-.25 *	.24 *	.03	-.02	-.08
	.15	-.04	-.15	-.01	.15
柔軟な自己	.04	.08	-.35 **	-.04	-.20
	-.05	.05	.20	.11	.18

* $p < .05$ ** $p < .01$ 上欄は男子, 下欄は女子を示す

Table4 自我強度尺度と多次元共感性尺度の相関係数 (高校生)

自我強度	多次元共感性				
	被影響性	他者指向的反応	想像性	視点取得	自己指向的反応
欲求不満耐久度	.10	.24 *	.15	.20	-.18
	-.11	.26 *	-.28 *	.15	-.12
自我同一性の確立	-.10	.06	.20	.21	-.12
	-.18	.02	.05	.18	-.06
適応的自己	-.07	.20	-.20	-.04	-.16
	-.15	.18	-.27 *	-.14	.18
現実的自己	.08	.14	-.15	.20	.21
	.21	.34 **	-.04	-.05	-.35 **

* $p < .05$ ** $p < .01$ 上欄は男子, 下欄は女子を示す

Table5 自我強度尺度と多次元共感性尺度の相関係数（大学生）

自我強度	多次元共感性				
	被影響性	他者指向的反応	想像性	視点取得	自己指向的反応
欲求不満耐久度	.21 *	.22 *	-.11	.18	.14
	.07	.28 *	-.05	.27 *	-.15
自我同一性の確立	-.12	.15	.04	.03	-.14
	.04	.20	.13	.11	.03
適応的自己	-.13	.15	-.12	-.01	.21 *
	-.10	.03	-.17	.28 *	-.10
現実的自己	.04	.20 *	-.04	.08	.17
	-.15	.13	-.02	.28 *	-.10

* $p < .05$ 上欄は男子，下欄は女子を示す

Table6 中学生男子と高校生女子の心理特性,
心理療法導入の抵抗の分類とその対応策の関係

学年と性	(A) 青年期の心理特性	(B) 導入の抵抗の種類		(C) 抵抗への対応策
中学生男子	自己防衛的でかたくなな態度を示す	(1) 問題意識の欠如	無気力 不安がない	(1) 親・学校の改善（環境調整）
		(2) 問題の回避	現実逃避	(2) 心理療法への期待や目標をもたせる
		(3) 大人への反抗	治療者も大人としてみる	(3) 描画やゲームなどをして来談への報酬を与える
		(4) 問題に対して自我親和的	非行や長期ひきこもり	(4) 少しずつ問題（恐怖・不安）に慣らしていく
高校生女子	交友関係で他者を積極的に理解しようとする	(1) 問題の回避	対人関係の傷つき	(5) 問題を解決した成功ケースのビデオを見せる
		(2) 大人への反抗	大人は自分をわかっていない	(6) クライエント自らがセルフコントロールトレーニングをする
		(3) 問題に対して自我親和的	非行グループやひきこもり	(7) 病院・施設という環境で治療や教育をする
		(4) 過去の心理療法経験の失敗によるもの	この治療者も以前の人と同様としてみる	

注) (B)のナンバーと(C)のナンバーとは対となる関連はない

Table7 心理療法導入抵抗の分類と問題内容, 及び交流手段との関係

学年・性	抵抗の種類	問題		交流手段
中学生男子	問題意識の欠如	困っていないという不登校児		青戸・田上 (2005) 自己プランニング・プログラムの作成
		自閉症		塩本 (2011) 描画中心
	反抗	両親への反抗, 攻撃		佐々木 (2009) ゲーム・描画から箱庭へ
		いじめへの復讐心		小泉 (2010) 身体とそのイメージの話
	問題の回避	不登校	いじめ	藤原ら (2004) 母子面接とプレイセラピー
			訪問面接	岩倉 (2003) まず母親面接をして, 本人とゲーム中心に
			対人緊張	竹田 (2006) 自律的認知行動療法
			家族関係	藤田 (2009) 家族面接
		チックと強迫行為		竹松 (1994) 夢の話と描画
		強迫障害		末木・梅垣 (2013) 母親を通した認知行動療法
		身体症状	吐き気	脇野 (1997) 吐き気と付き合い描画へ
			腰痛	谷野 (1991) 入院して描画へ
			過呼吸	鈴木 (2008) 箱庭療法
高校生女子	問題意識の欠如	話にまとまりがない		田畑 (1985) 箱庭療法
	反抗	父親への反抗心		篠原 (2012) 母親と併行面接
	問題の回避	高校中途怠学		荒木 (2010) キャリアカウンセリング
		家族関係		森平 (2015) 本人と心理療法
		離人症		田熊 (2002) 夢を介した心理療法
		解離		中山 (2014) 身体感覚を介した心理療法
		希死念慮		人見・加藤 (2009) 病院治療と併行心理療法 富樫 (2000) 入院して交換日記
		ヒステリー性てんかん		三宅 (1999) 箱庭療法
問題に対して自我親和的な抵抗		いきなり問題にふれず, クライエントの関心のある話題, ゲーム, 描画を介した交流から始める		
過去のカウンセリング経験の失敗による抵抗		過去の心理療法経験をよく聞き, 心が傷ついた点を明らかにし, 本人が期待している心理療法目標についてしばらく話し合う		

村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」論

— 80年代までの＜中国人＞に対する＜記憶＞変遷及び原因分析 —

呉 庭

要旨

ここ数年、村上春樹は中国においてほかの国が比べものにならないほどの愛読者を持っている。作品としては＜中国＞を題材とする作品が少ないうえ、＜中国＞にもあまり関心がなさそうである。それにもかかわらず、村上の「周り」は＜中国＞と緊密に関連している。村上の初期の文学作品には＜中国＞にどのような「認識」があるのか、という問いに対する考察が村上文学の研究に役立つのは言うまでもない。本稿は、村上の最初の短篇小说・「中国行きのスロウ・ボート」を中心に、語り手「僕」と村上の関係を明らかにした上で、80年代までの＜中国人＞に対する村上の＜記憶＞変遷を考察し、またこれに伴う原因を分析していく。

キーワード

村上春樹 中国 スロウ・ボート 記憶

1. はじめに

世界中で中国ほど多くの村上文学の愛読者を持つ地域はないだろう。村上春樹は、『風の歌を聴け』（1979年）でデビューして以来、数多くの作品を執筆してきたが、作品の中で中国は直接的に扱われるどころか、間接的に扱われることも少ない¹。村上文学はアメリ

¹ 中国人（華僑）が登場人物の一人として「鼠三部作」での「僕」友人のジェイ（『風の歌を聴け』（1979年、「僕」はジェイに「僕の叔父さんは中国で死んだんだ」という内容を述べた。）、『1973年のピンボール』（1980年、ジェイは、自分が飼猫の片手が誰かに潰されたことを語っている）、『羊をめぐる冒険』（1982年、ジェイはジェイズ・バーのバーテンダー））と『アフターダーク』（2004年、19歳の中国人娼婦郭冬莉が日本人に殴られたことなど）での郭冬莉。一方、比較的にはっきりとして中国に関連する内容は含まれた作品は『ねじまき鳥クロニクル』（1994-1995年、満州国付近での「ノモンハン事件」にかかわる作戦

カ文化に深く影響されていると言われるが、村上が大学に入学する前までに暮らしていた西宮、芦屋、神戸の周りには、在日中国人が多く暮らしていた。村上は、現在までに1度だけ中国へ行ったことがあるが、これは「戦争」の研究のためだけである。2019年5月、『文芸春秋』に掲載された村上の「猫を棄てる——父親について語るときに僕の語ること」によると、村上の父は第二次世界大戦中、中国大陆などへ3回にわたる召集を受け、出兵したことが明らかになった。村上が中国に特別な感情を抱いているのもこれと繋がるに違いない。毎朝の朝食前に、菩薩を収めたガラスの小さなケースに向かって「長い時間、目を閉じて熱心にお経を唱えていたこと」という習慣は「一日たりともその「おつとめ」（と父は呼んでいた）を怠らなかったし、誰にもその日々の行いを妨げることはできなかった」²と語っている。さらにその習慣は、村上の父が「前の戦争で死んでいった人たちのためだと。そこで亡くなった仲間の兵隊や、当時は敵であった中国の人たちのためだと」³の「おつとめ」であることがわかる。生まれてから18歳まで家を離れなかった村上にとって毎日そのような光景があったことにより戦争や中国に対する心情は複雑ではないだろうか。また村上は中華料理が嫌いということもある。そのような中での村上は、中国にどのような認識・印象を持つのか、これは村上文学研究にとっても重要なことである。村上文学の初期に、「中国行きのスロウ・ボート」⁴という作品がある。この作品はタイトルに中国が入っており、さらに内容にもよく中国人のことを登場させている。自らの第1の短篇集の表題に同作のタイトルを使用したことから、村上は「中国行きのスロウ・ボート」に対する特別な執着心が伺える。村上は「自作を語る 短篇小説への試み」にも「そのような補修工事（1990年、短篇集「中国行きのスロウ・ボート」などに対する改稿——引用者注）のあとで思うのだが、僕という人間、つまり村上春樹という作家のおおかたの像は、この作品集の中に既に提出されている。」⁵と述べた後、「僕の世界というもののありようは未完成なりに、ぎこちないなりに、バランスが悪いなりに、この処女短篇集におおむね提示されているように思える。スタイルなり、モチーフなり、語法なり、そういうものの原型はここに一応出揃っていると言っているのではないかと思う」⁶という内容に続い

行動、中国人虐殺などの内容）と『騎士団長殺し』（2017年、継彦が20歳に徴兵で中国へ配属され、「南京大虐殺」に無理やり加担させられたことなど）。

² 村上春樹「猫を棄てる——父親について語るときに僕の語ること」（『文芸春秋』6月号。2019年5月、242-243頁）

³ 同2。243頁。

⁴ このタイトルは、1948年にフランク・レッサーが作曲し、ケイ・カイザー楽団がヒットさせ、ミリオンセラーとなった曲である。村上は、テナー・サクソ奏者のソニー・ロリンズの演奏が大好きで彼の演奏により、知ったのである。英語で表記すると、On A Slow Boat To China。

⁵ 村上春樹「自作を語る 短篇小説への試み」（別刷）『村上春樹全作品1979-1989③』（講談社1990.09）。III頁

⁶ 同5。IV頁

た。村上自身が語ったように、自分の作家としてのおおかたの像も自分の世界というもののありようもその短篇集に提示されているということである。それでは、村上にとって「おおかたの像と自分の世界」の1つである〈中国〉はどのようなものだろうか。

2. 底本について

「中国行きのスロウ・ボート」は、村上の処女短篇小説集⁷の中に収められており、この作品は村上にとって最初の短篇小説である。当小説の初出は、1980年文芸誌『海』4月号（以下初出誌版と略する）である。1983年5月に中央公論社から、ほかの6つの短篇と共に単行本として改稿したのち、『中国行きのスロウ・ボート』（以下単行本版⁸と略する）にまとめられ刊行された。そして1990年9月、講談社により『村上春樹全作品 1979-1989 ③』（以下全作品版⁹と略する）にも収録されているが、「かなり手を入れた」と語っていることから、再度改稿があったことが分かる。また村上は「自作を語る」短篇小説の試みで自分がなぜ改訂を加えたかという理由を語った後、「今の時点から過去の自分自身に手を貸すということである。」¹⁰という補足がある。山根由美恵氏も「中国行きのスロウ・ボート」に関しては、改稿によって作品の主軸が変わったのではないかと。つまり、〈記憶〉の捉え方がより鮮明になり、中国が特権化されたことにより、先行の論が指摘してきたテキストの戦略や〈自己化作用〉では捉えきれない部分が加わったのである。¹¹と締め括っている。また「なるべくオリジナルの雰囲気を変えないように細部の交通整理をしたつもりだが、やはり少しは色あいが変化したかもしれない」¹²と村上も認めたように、1980年の初作と改稿した後の1990年の作品は変化したということである。それらにより、1980年発表された「中国行きのスロウ・ボート」はある意味で1990年、新たに作られたと理解してもよい。本論で使用する底本は1990年に改訂された全作品版に収録されている「中国行きのスロウ・ボート」である。

⁷ 1980年4月から1982年12月まで発表された七つの短篇。年代順に列举すると、「中国行きのスロウ・ボート」、「貧乏な叔母さんの話」、「ニューヨーク炭鉱の悲劇」、「カンガルー通信」、「午後の最後の芝生」、「土の中の彼女の小さな犬」、「シドニーのグリーン・ストリート」。

⁸ 短篇「中国行きのスロウ・ボート」に対して主人公たちの会話、「僕」の心境など書き換えがある。

⁹ 山根由美恵「中国行きのスロウ・ボート」『村上春樹 作品研究事典（増補版）』（村上春樹研究会編 鼎書房 2007.10 124-125頁）によると、以下五つの大きな相違点が挙げられる。1、中国人小学校に行った〈僕〉が最後に落書きした結末の削除。2、中国人女子大生の性格が多く描かれ、より人間味を増す。3、中国人女子大生に対する〈僕〉の態度は若い男性にありがちの傲慢さが加えられる。4、〈僕〉もセールスマンも意識的に〈記憶〉について語る。5、〈僕〉が行けない場所にニューヨークなどが挙げられていたが、中国のみに限定。

¹⁰ 同5。

¹¹ 同9。125頁。

¹² 同5。V頁。

3. 先行研究

青木保氏は、「中国行きのスロウ・ボート」の中で「僕」が3人の中国人と出会った時期、場所など述べた上で「ここまでくると、読む側にとっては、中国人のことはもうどうでもよくなってしまっていて、語られようとするのは六〇年代から八〇年代へかけての「僕」の辿った道筋の里程標であることがわかる。」¹³と論じている。そこから中国のことを無視するように「六〇年代から八〇年代へかけての「僕」の辿った道筋の里程標」という中国と関係ないという年代に目を向け、「僕」にとっての意義を承認し、提示していることがわかる。また、川村湊氏も「ここに現われる三人の中国人——中国人小学校の教師、女子大生、百科事典セールスマン——との出会いが、それぞれ一九六〇年、七〇年、八〇年前後というふうに十年刻みであること（むしろそれは“七〇年”を中心として、その前史と後史だ）に僕たちは気づかざるをえない。」¹⁴というだいたい同じような「10年代史ごと」の考えを出している。

一方、山根由美恵氏は＜記憶＞の捉え方を作品の読みのポイントであるとし、「＜僕＞に残っていた外野手と中国人の＜記憶＞は、＜僕＞がまだ自分自身に誇りを持っていた証左として登場する。この誇りを＜中国＞という形に置き換え、現在の不安定な自分自身にめざすべきものとする。この＜記憶＞をいかに位置付けるかが「中国行きのスロウ・ボート」の価値に繋がるであろう。」¹⁵と提示している。

また、「中国行きのスロウ・ボート」は短篇集『中国行きのスロウ・ボート』の表題で、作品の知名度を高めるのに役立つと同時に、村上の至極関心中で、また処女短篇として自身の原像（中国人のことも内包）が注がれているという役割を果たした。さらに文中の「中国」の「虚」と「実」の問題は各評論家が関心を向けていたのである。登場する3人の「中国人」が「われわれ自身の象徴」だと思ふ阿部好一氏と＜日本人＞に対する他者の総体と思ふ田中実氏は「中国人」が「虚」である考えを述べたが、川村湊氏は「（前略）村上春樹は「中国行きのスロウ・ボート」では、“中国人”を、（中略）それらしい人物や挿話を律儀に登場させストーリーの整合性をつけている。だが、むしろ村上春樹的世界においてその律儀さや整合性こそが重要であることはいままでもない。」¹⁶とし、「“中国人”“羊”というコトバに「意味や形」がないはずがないし、それは「概念的な記号のよ

¹³ 青木保「六〇年代に固執する村上春樹がなぜ八〇年代の若者たちに支持されるのだろうか」（『中央公論』1983年12月号第98年第14号、271頁）

¹⁴ 川村湊「書評『中国行きのスロウ・ボート』村上春樹」（『群像』1983年8月第38巻第8号、291頁）

¹⁵ 同9。125頁。

¹⁶ 同14。290頁。

うなもの」ではなく、むしろ現実的な多様、多彩な“イメージ”を孕む実体的なものであるだろう。」¹⁷として「中国人」が「実」であると論じている。ジェイ・ルービン氏も「この短篇集の標題作「中国行きのスロウ・ボート」（一九八〇年四月）も、別の意味で村上の特徴を顕著に示している。初めての短篇は、中国に対する村上の根強い関心を暗示した初の短篇でもあった。」¹⁸と指摘している。同時に「いまでは、日本人にとってかなり厄介な記憶として、村上が中国と中国人を一貫して意識してきたと見ることができるだろう。」¹⁹という締めくくりも興味深い。

さらに、70年代には、公式の中日関係は締結し始めていたが、南京大虐殺が再び一部の教科書に載るようになったことや、80年代前半には「侵略」を否定しようとする教科書問題、戦争責任問題及び1989年には昭和天皇の死などがあった背景から、山根由美恵氏は「この「中国人」は、アジアと日本との関係のアナロジーとして、いわば、時代の象徴として描かれている所もあり、そのことを語る「僕」の意識の上に村上春樹の社会意識の萌芽が認められるのである。」²⁰という指摘をした。

本論は以上の先行研究を踏まえ、3人の中国人と出会った時代をそれぞれ<10年代>に分け、「僕」が<中国人>に対する<記憶>の変遷を考察して、またその原因を究明していく。

4. 時間構造での「僕」と村上春樹

語り手の「僕」が、記憶の中で時代に従い、小学校時代、大学時代、そして社会人時代に会った3人の中国人に関する3つのエピソードを通し、追憶するように展開している。

1人目の中国人に出会ったのはいつか、語り手の「僕」もはっきりしていないが、「一九五九年、または一九六〇年というのが僕の推定であるが、どちらにしたところで違いはない。」（11頁²¹）としている。「僕」は模擬テストを受けるためにいつも通っている学校ではなく港町の山の手にある中国人子弟の学校というところへ行かされた。模擬テストとはいえ、別の学校で受けるという点からみれば、普通模擬テストではなく小学校卒業試験の可能性ではないかと推測できる。村上の年譜によると、6歳の1955年4月、彼は西宮市

¹⁷ 同14。

¹⁸ ジェイ・ルービン「うろ覚えの曲」『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』（畔柳和代訳 新潮社 2007年2月、76頁）

¹⁹ 同18。77頁

²⁰ 山根由美恵 村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」論—対社会意識の目覚め—（『国文学攷』第一七三号 広島大学 二〇〇二年三月 36—37頁）

²¹ 特別な説明がなければ、本論の作品引用は全部全作品版からである。

立香櫨園小学校入学したことが分かる。このことから 1959 年または 1960 年の「僕」の模擬テストは村上の卒業試験の時期ではないだろうか。つまり語り手の「僕」は村上自身であろうと考えられる。言い換えれば、1960 年ごろ村上である「僕」は中国人小学校で初の中国人に出会ったのである。

2 人目の中国人は大学時代にアルバイト先で知り合った女子大生で、「彼女と僕と同じ十九歳」（20 頁）という設定があった。この「僕」が 19 歳だったのは、村上も 19 歳であった 1968 年である。村上是一年浪人した後、1968 年に早稲田大学に入学したことから「僕」と同時期に大学生活を送っていたことが分かる。さらに、彼女とのエピソードの場所が東京であり、村上の大学所在地も東京であったことから同じ場所で生活していたことが分かる。

3 人目の中国人は「僕」の高校時代の知り合いだったが、1977 年 28 歳の時に再会した時には百科事典のセールスマンであった。「そのとき僕は二十八になっていた。結婚してから六年の歳月が流れていた。」（29 頁）という設定と村上の年譜から、1971 年 22 歳村上が学生結婚していることから 1977 年 28 歳の「僕」は大体、村上の 80 年代ごろという設定が明らかになってきた。

以上の考察から、村上は語り手の「僕」によく自身を投影していることがわかる。また、3 人の中国人はそれぞれ 60 年代ごろ、70 年代ごろ、80 年代ごろという 3 つ時代とよく繋がっているのである。その作品は記憶の間違いもあれば、フィクションの部分もあるだろうが、エッセイとか自伝小説という感じが強いのではないだろうか。

5. 80 年代までの＜記憶＞変遷

作品は 1 章～5 章からなるが、1 章と 5 章は現在の時点で 2 章、3 章及び 4 章は過去の記憶について語られている。1 章では現在、「僕の記憶力はひどく不確かである。」（12 頁）という記述がある。そこから 60 年代ごろから 80 年代ごろまでに会った 3 人の中国人のエピソードを通して、回想する形式で＜記憶＞は「僕」の状態に従いそれぞれ提示している。

1 人目の中国人に出会ったのは小学校時代の 1959 年か 1960 年どちらか確然と覚えていないが、「ひとつは中国人の話であり、もうひとつはある夏休みの午後に行われた野球の試合である。」（13 頁）という 2 つのエピソードだけを明確に覚えている。このエピソードから小学校時代の中国人を引きだしてくれる。具体的な年は現在不明であるが、この 2 つのエピソードだけがあの時の記憶として「僕」の＜記憶＞に「鮮やかな」状態で残っているのである。中国人の話は「僕」が港町の山の手にある中国人小学校で模擬テストを受けた際の監督官である。「監督官は四十歳よりうえには見えなかったが、左足を床にひきずるように軽いびっこをひき、左手で杖をついていた。」（16 頁）というような中国人である。また試験前に、日本人の「僕」を含める中日受験生たちに「みなさんもご存じのよう

に、中国と日本は、言うなればお隣同士の国です。」(17 頁)、「でも努力さえすれば、わたくしたち(「僕」を含める中日受験生——引用者注)はきっと仲良くなれる、わたしはそう信じています。でもそのためには、まずわたくしたちはお互いを尊敬しあわねばなりません。それが……第一歩です」(18 頁)など、中日友好関係を築こうとする内容である。このような内容は村上文学でも極めて珍しい。そこに 1959 年か 1960 年、つまり 60 年代ごろの「僕」の〈記憶〉の中の〈中国〉に対する像がよく表れている。1949 年生まれの上村はその当時 10 歳ごろで、戦争から 15 年ぐらい経っていたが、戦争が遠くなっていったのではない。またあの頃「僕」の生活も「戦後民主主義のあのおかしくも哀しい六年間(「僕」の小学校時代——引用者注)の落日の日々」(12-13 頁)と示されたように、小学校時代の生活はよかったとは言えない時期である。周知のとおり、戦後民主主義は第二次世界大戦後、アメリカ占領軍の戦後改革であり、日本の政治・社会・文化における民主主義の特徴・特質を言い表す言葉である。また、戦後民主主義は戦後という特別な背景から誕生した概念で、日本に与えた影響も大きい。そして、中国人は 40 歳でびっこをひいていたが、15 年前は 25 歳ごろだったことから、そのびっこをひくことになった原因は戦争であると連想しやすい。さらに試合で脳震盪を起こしたというエピソードをなぜ正確に思い出せるかというところも一種の「傷」だからである。そのような「傷」は戦争、また中国人に関連している。つまり 60 年代ごろの「僕」が小さかったが、「戦争」と中国人に関連している「僕」の〈記憶〉の状態は「鮮やか」である。

「僕」が出会った 2 人目の中国人は「僕」と同じ 19 歳の女子大生だった。もともと接点なかった彼らはアルバイトで知り合った。3 週間のアルバイトが終わった日に、「僕」たちの間で楽しくないエピソードが残されている。夜 10 時過ぎに「僕」が山手線の駒込駅まで彼女を送り、電車に乗せるはずだったが、逆回りの電車に乗せてしまった。日本人であり、大学生活で住み慣れていたはずの東京での自分の間違いに、「僕」は「どうしてかわからないけれど、ついうっかり間違えたんだと僕は言った。きっとぼんやりしてたんだ。」(26 頁)という説明がある。さらには「酒を飲み過ぎたせいだろうか？」(25 頁)という自問にも否定したり、「「わざと間違えた電車に乗せたわけじゃないんだ」(28 頁)と僕は言った。」という説明があるため、このことは「僕」の〈記憶〉が混乱したからこそ、そのようなミスをしたという設定になったのだろう。〈記憶〉が混乱になったからこそ、そのようなミスをした。さらに、同じように「僕」は 2 つ目の過ちをした。「僕は煙草の空箱と一緒に、彼女の電話番号を控えた紙マッチまで捨ててしまったのだ」(29 頁)という致命的な過ちである。作品には 2 つ目の過ちに対する「僕」の状態の描写が少ないが、それも「僕」の〈記憶〉が混乱していたからこそ、電話番号を控えた紙マッチのことを忘れたのではないか。従って 70 年代ごろ、混乱した〈記憶〉で大学生になった「僕」は中国人の彼女に対する〈記憶〉は断念の兆しを現したのではないか。「僕はずいぶん調べてまわったのだけど、アルバイト先の名簿にも電話帳にも、彼女の電話番号は載っていなかった。大学に問い合わせしてみてもわからなかった。」(29 頁)という努力の姿

を見せたが、「それ以来彼女とは一度も会っていない。」ということになってしまった。このエピソードを通して「僕」は失った彼女とともに、中国人に対する「僕」の＜記憶＞状態も積極的ではないが、次第に消えているところである。つまり 70 年代ごろ、彼女に対する＜記憶＞は混乱の＜記憶＞で、これは前の「鮮やかな」＜記憶＞の悪化の第一歩ではないか。

28 歳になった社会人の「僕」は喫茶店で高校時代の級友に再会した。級友は「僕」が出会った 3 人目の中国人である。「僕」はなにも彼のことを思い出せない。しかしそれに対して、「僕」と級友は高校時代の知り合い程度の関係だったにもかかわらず、級友は「通りを歩いてガラス越しに一目見てすぐわかった」(31) というように「僕」の記憶に反して級友は鮮明な記憶を持っている。「僕」はどうしたのだろうか。＜記憶＞が悪いのか。

「そのとき僕は二十八になっていた。結婚してから六年のあいだに三匹の猫を埋葬した。幾つかの希望を焼き捨て、幾つかかの苦しみを分厚いセーターにくるんで土に埋めた。」

(29 頁) という鮮明な記憶の状態がある一方、級友だった中国人のことは思い出せない。少し不自然な感じがしないだろうか。原因は「僕」に潜在的に「昔のことを忘れたがっているんじゃないのかな」(30 頁) という傾向があるからだ。中国人に向かって「昔のことを忘れたがる」というのは高校時代の級友のことももちろん「昔のこと」だから、忘れたがるのであろう。また、このエピソードではもうひとつ＜記憶＞の「メタファー」と思われるものが登場した。級友は「僕」と再会し、向き合って座った時、「ポケットから煙草の箱と小さな金のライターを取り出し、火をつけるでもなくテーブルの上に置いた。」

(30 頁) このライターが＜記憶＞の光を明かす役割を果たしている。ここから「僕」は級友の話に従い、だんだん級友のことを思い出してきたからである。つまり、「ライター」を通して思い出せない級友の＜記憶＞が明るくなってきたということである。そして、級友が「「さて、そろそろ行くとするか」と彼(級友——引用者注)は煙草とライターをポケットにしまいこみながらそう言った。」(36 頁) というところで、ここまでの作品の中で「僕」が出会った三人の中国人は全員出揃った。さらに＜記憶＞の中の中国人の回想もここで終わりに迫っている。級友は「僕」が最後に出会った中国人である。「僕が彼に言いたかったのは何か中国人に関することだった。でも僕には自分がいったい何を言いたいかきちゃんと把握できなかった。だから僕は何も言わなかった。ただ月並みな別れの言葉を口にただけだった。今だってやはり何も言えないだろうと思う。」(37 頁) つまり「僕」の中国人に対する＜記憶＞も級友がライターをポケットにしまい込むにつれ、光を失い、消えていったのである。つまり 80 年代ごろ、中国人に対する「僕」の＜記憶＞は前に続き、消えていった。

6. 消失していた＜記憶＞と遠ざかっていった＜中国＞

人間は、記憶が欠けないものである。なぜなら記憶も過去と未来を繋げる重要な役割を果たしているからである。60 年代ごろ、70 年代ごろ、80 年代ごろ、「僕」の中国人に対す

る＜記憶＞は戦争で鮮明な＜記憶＞、＜記憶＞の混乱で消えている＜記憶＞、潜在的に昔のことを忘れたくて消えた＜記憶＞という過程で、村上はそれぞれの時代、自分が中国人に対する＜記憶＞を語ってくれたのである。

60年代ごろ、小学校時代の「僕」は戦後生まれで、戦争から15年ぐらい経っていたが、戦後民主主義のもとで「おかしくも哀しい六年間」の小学校時代を送っており、おぼろげな記憶しかない中でびっこをひいていた中国人の試験監督官の話と、野球の試合で脳震盪を起こしたという「傷」のことだけ、正確に思い出すことができている。これはみな戦争という点に関連しており、「僕」の記憶に明らかに残っている。また、びっこをひいていた中国人の話を通して、＜中国＞に対する「僕」の意識は積極的に直面しているのではないかと、ということも表現できる。

さらに70年代ごろの「僕」の大学時代は、人として価値観を形成することに極めて役立つ時期であった。しかし、中国人女子大生と付き合っている途中で、混乱した＜記憶＞により彼女との初のデートを終えて別れる際、彼女が乗るはずだった電車の逆回りの電車に乗せてしまったことのみならず、彼女と連絡できる唯一の手段である電話番号を控えた紙マッチまでも捨ててしまったのだ。＜中国＞に対する「僕」の意識は前より明らかに「後退」してしまった。そして80年代ごろ、社会人時代の「僕」は高校時代の中国人級友のことをなにも思い出せず、また潜在的に「昔のこと」の＜記憶＞を忘れたい傾向もある。＜中国＞に対する「僕」の意識は作品の末尾を迎えるにつれ、中国人に対する回想も終わってしまった。そのため「僕」の中国人についての記憶もここで消えていった。

70年代ごろの1968年2人目の女子大生であれ、80年代ごろの1977年3人目（作品で最後出会った中国人）高校時代の級友であれ、「僕」が中国人に対する記憶も意識も、60年代ごろの1959年か1960年の1人目の小学校時代の監督官より、淡くなり消える一方である。初出誌版の1980年、または全作品版の1990年（改訂）で、村上はなぜ中国人を対象とし、「僕」の消失していった＜記憶＞にこだわって作品を作ってきたのか。「“村上春樹的現象”とは何か？それは、たぶん「一九八〇年代の初めは、僕らが村上春樹の本を夢中になって読んだ年代だった」と振り返られるような“時代的”な現象（それは風俗ともマス・イメージともサブ・カルチャーとも呼んでよい）を指している。村上春樹の小説は、そのコトバをめぐる作品の内部よりも、むしろその小説世界の外側のさまざまな時代的、風俗的なイメージの輻輳性への共感によって読まれているのだ。」²²と川村湊氏が指摘したように、時代背景に緊密しているのである。それは村上作品の顕著な特徴である。70年代ごろ、日本人にとって第二次世界戦争は徐々に遠くなっていたようだったが、戦争は遠く離れてはいなかった。東西冷戦の下で日本は冷戦前線に位置づけられていたからである。1960年半ばから70年代前半まで、米国によって勃発したベトナム戦争が後期に伴い、

²² 同14。291頁

世界中で戦争反対は相次いでいたのである。しかしながら中国には、1966年から1976年まで10年続いた「文化大革命」という革命運動があった。隣国であり、東西冷戦の前線に立っていた日本が革命運動に注目していたのはごく自然のことである。それに伴い、中国に対するマイナスイメージも増え続けてしまったのである。一方、戦後の復興から経済成長を経て日本は経済強国になっていたが、「平和国家の象徴」に変わっていた昭和天皇は国民的自信を取り戻すために、1971年9月訪欧（公式訪問（ベルギー・イギリス・西ドイツ）、非公式訪問（デンマーク・オランダ）、休養（フランス・スイス）計ヨーロッパ七か国）、1975年9月訪米を実現したが、その2つの訪問を契機に天皇の戦争責任の問題が再び、議論されたのである。また1971年、中国は国連復帰確定を機に、国際地位が高まりつつあったためアメリカを始めとした多くの国は中国に対する抑制をさらに厳しくしていたのである。それと同時に国際政治環境の変化に伴い、ソビエト連邦に対抗するために1972年2月、ニクソン訪中、米中共同コミュニケを発表した後、9月田中角栄首相も訪中、中日共同声明に調印し、1974年11月、中日平和友好条約の交渉開始から、1978年8月中日平和友好条約締結に至って以後、中日関係は黄金時代を迎えて来たが、その間「戦争責任」や「南京大虐殺」などがもう一度注目され、議論されていたことが話題になってしまったのである。それに加えて1982年歴史教科書問題も厳しくなっていき、1985年中曽根康弘首相も靖国神社を公式参拝したなど、中日関係にも暗い影を落としてきた。そして1989年1月、昭和天皇の死を機に、「戦争責任」が中日に大きな影響を及ぼしてきた。ほかにも1989年6月、中国で発生した「天安門事件」も日本の知識人に影響を与えたに違いない。「日本の国内のさまざまな集団が、学校教科書から戦時中の残虐行為を抹消し、日本の中国侵略を糊塗しようとする動きを強めた、一九八〇年代の中日関係は以前よりも複雑になった。」²³。そのような流れの中で中日関係は、戦争と中国に対するマイナスイメージによって貫いてきたのである。「いずれにせよその父の回想（捕虜となった中国人兵を処刑したことなど——引用者注）、軍刀で人の首がはねられる残忍な光景は、言うまでもなく幼い僕の心に強烈に焼き付けられることになった。ひとつの情景として、更に言うならひとつの疑似体験として。言い換えれば、父の心に長いあいだ重くのしかかってきたものを——現代の用語を借りればトラウマを——息子である僕が部分的に継承したということになるだろう。」²⁴と村上自身が綴ったように、父の戦争体験により「僕」にもある程度のトラウマが引き継がれたのである。それは20年経た現在でも「死はなぜかしら僕に、中国人のことを思い出させる」（13頁）という3人の中国人に関する＜記憶＞のエピソードを回想する前の「僕」の心境と合致しているのであろう。「僕」の＜記憶＞で1人目の中国人も戦争と関連して始まり、2、3人目の中国人のエピソードも「戦争」という潜在意識

²³ マーク・アイコト著 岡田良之助訳「侵略、加害および南京大虐殺にかかわる中国の歴史学」『歴史学のなかの南京大虐殺』（ジョシュア・A・フォーゲル編者、柏書房、2000年5月、59頁。）

²⁴ 同2。253頁。

を持っており、さらに中国に対するマイナスイメージが村上に影響して設定されたのだろう。80年代ごろまで、「僕」は消しようとする中国人に関する「記憶」もその背景で＜記憶＞の消失により、中国に対する気分悪い表現ではないか。

中華料理が嫌いで、現在までに1994年ノモンハン事件²⁵の跡を辿るためだけに、中国へ行ったことがある村上としては、「友よ、中国はあまりに遠い。」（39頁）が示したように、中国行きのスロウ・ボートはあまり順調ではなかろう、ということが推測できる。

参考文献（引用文献以外）

劉傑・川島真『対立と共存の歴史認識—日中関係 150 年』（東京大学出版会 2013. 8）

石田雄「II 戦争責任論五〇年の変遷と今日的課題」『記憶と忘却の政治学 同化政策・戦争責任・集合的記憶』（明石書店 2000. 6）

²⁵ 1939年5月から9月にかけて、満州国とモンゴル国の間の国境線をめぐって発生した紛争のこと。

通訳・翻訳の視点から見る日中両言語における語順の逆転現象

朱 浩 昱

要旨

日中両言語を翻訳する際、語順が逆になる現象（語順の逆転現象）が語彙、フレーズ、文の各レベルにおいて広く見られる。

語彙レベルでは「死生観（中国語：生死观）」、「短縮（中国語：缩短）」、「面会（中国語：会面）」など、フレーズレベルでは「3泊4日（中国語：四天三夜）」、「ファンの一部（中国語：部分球迷）」、「販路開拓（中国語：拓展销路）」などがあり、文のレベルでは「上海に帰ります（中国語：回上海）」、「言わないのが普通です（中国語：一般不说）」などのように、訳すと語順が逆になる例が多く存在している。

筆者は、翻訳者通訳者が文章を訳す時にこのような語順の逆転現象を意識することによって、より自然な訳し方ができると考えている。従って、両言語の語順が逆になっている語彙、フレーズ、文型をそれぞれリストアップし分析することは、通訳・翻訳のレベルアップに繋がると考える。更に、この語順の逆転現象の背景にある原因の解明は、両言語の本質をより深く理解することに繋がるであろう。

筆者は、語彙、フレーズ、文の各レベルの語順の逆転現象の原因を以下の3つに分析している。

1つ目として、両言語は構造的に異なっているという点が挙げられる。中国語はSVO（主語＋述語＋目的語）であるのに対し、日本語はSOV（主語＋目的語＋述語）の構造となっている。よって、「面会（中国語：会面）」や「販路開拓（中国語：拓展销路）」、「言わないのが普通です（中国語：一般不说）」のような語順の逆転現象が生じる。

2つ目として、中国語が孤立語であるのに対し日本語は膠着語であるので、中心的な語彙の前に多くの連体修飾語を付け加えることができるという点が挙げられる。よって、「マカオが中国に返還されて15年となる20日、習主席は～（中国語：20日，即澳门回归中国的15周年纪念日，习主席～）」のように訳文が逆順になるのである。

3つ目として、両言語は習慣・認識（ロジック）が異なるという点が挙げられる。日本語はメインメッセージが最後に来る傾向が強いのにに対し、中国語はメインメッセージが最初に来る傾向が強い。従って、「死生観（中国語：生死观）」、「三泊四日（中国語：四天三夜）」、「今日の東京株式市場の終値は460円39銭高の1万4,466円16銭です。（中国語：今天的东京股市收盘价为14466.16日元，比上一交易日上涨460.39日元。）」のような語順の逆転現象が存在している。

本稿は以上のように、語彙、フレーズ、文それぞれ異なるレベルに存在する日中両言語における語順の逆転現象が、言語の構造、性質、習慣・認識（ロジック）と深く関係しているということを論じる。

キーワード：語順、逆転、日中両言語、通訳・翻訳、メインメッセージ

1. はじめに

日中両言語を訳す際に、語順を逆転させることが多い。筆者は翻訳の過程で、このような語順の逆転現象が単語レベル、句レベル、文レベル、談話（テキスト）レベルのあらゆるレベルに存在していることにしばしば気づく。逆転現象にはどのような特徴があるのか、またその背景にある原因は何かということをも明らかにすることで、より自然な訳し方ができるのではないかと考え、こうした日中翻訳での様々なレベルにおける逆転現象を幅広く記述し分類することにした。

2. 単語レベルの逆転現象

中国語と日本語の両言語には、字順が逆転している単語が数多く存在している。訳す際に単語そのものとして覚えておけば良いのだが、逆転している母国語の単語に影響され、誤用が生まれやすい。

字順の逆転現象に関しては、張力（2011）がある。ここではその分類方法を踏まえ、以下の3つに分ける。

a. 並列構造

死生観（生死観）、夜昼（昼夜）、終始（始終）、売買（买卖）、運命（命运）、北東（东北）、畏敬（敬畏）、白黒（黑白）、制限（限制）、段階（阶段）、限界（界限）、売買（买卖）、貸借（借贷）、貸し借り（借贷）、罰則（责罚）、従順（顺从）、需給（供需）、飲食店（餐饮店）、爽涼（凉爽）、余剩（剩余）、変転（转变）、食糧（粮食）、率直（直爽）、給付（付给）、期日（日期）、決裁（裁决）、運搬（搬运）、紛糾（纠纷）、移転（转移）、受領（领受）、充填（填充）、要綱（纲要）、買収（收买）、暴風（风暴）、濾過（过滤）、音声（声音）、選評（评选）、乱雑（杂乱）、強堅（坚强）、正々堂々（堂堂正正）、展延性（延展性）、緑黄色野菜（黄绿蔬菜）、鉱工業（工矿業）、商工会議所（工商总会）（他多数）

これらの並列構造の単語は、日中両言語にそれぞれ変遷の経緯、また、両国の認識の違いに起因して逆転現象が起これと考えられる（張力 2011）。

例えば、論語の言葉である「生死有命（「論語」顔淵から⁽¹⁾）の訳文は「死生命あり」というふうに訳されていた経緯があり、恐らく昔から日本語として「死生」という順番が最適だったのではないかと思う。「死を通した生の見方を強調する日本人独特の宗教観を示している」と主張する人もいる⁽²⁾。死生観（生死観）や運命（命运）といった例から見れば、日本語のメインメッセージが後ろに来る傾向が強く、中国語のメインメッセージが前に来る傾向が強いと筆者が考えている。

b. 修飾構造

b-1 短縮（缩短）、軽減（减轻）、半減（减半）、倍加（加倍）、敗戦（战败）、満期（期满）
b-2 鬼女（女鬼）、気管支（支气管）

b-1 のように、日本語（短縮）は修飾語（短く）＋動詞（縮む）の修飾構造となっているが、中国語（缩短）は動詞（縮む）＋結果（短く）の「動補」構造となっている。よっ

て、両言語において逆転現象が生じている（張力 2011）。

b-2 のように、日本語（鬼女）は「鬼と化けた女」という複雑な連体修飾構造に対し、中国語（女鬼）は「女の鬼」という簡単な修飾構造である。

また、「気管支」も中国語と異なる発想で、日本語は「気管分岐部で左右に分かれてからの先」という意味に対し、中国語は「メインの気管ではない『支気管』」という意味である。つまり、日本語が複雑な修飾構造であるのに対し、中国語は単純な修飾構造であると言える。

c. 目的語・述語(OV)構造

c-1	鉄欠乏（ <u>缺鉄</u> ）性貧血、面会（ <u>会面</u> ）、年賀（ <u>贺年</u> ）、 <u>穎脱</u> （ <u>脱穎</u> ）、 <u>航続</u> （ <u>续航</u> ）、 <u>淫売</u> （ <u>卖淫</u> ）、 <u>詩吟</u> （ <u>吟詩</u> ）、 <u>水滴石穿</u> （ <u>滴水穿石</u> ）
c-2	救急（ <u>急救</u> ）

c-1 のように、日本語は「目的語（以下 O と表記する）＋述語（以下 V と表記する）」構造であるのに対して、中国語は「述語＋目的語」という構造となっている。中国語は VO で、日本語は OV という形であり、逆になっているわけである。

例えば、日本語の「鉄欠乏性貧血」は、O（鉄）＋V（欠く）の OV 構造となっているが、中国語（缺鉄）は V（缺）＋O（鉄）の VO 構造となっている。

ただし、c-2 のように、「救急（急救）」は上記の説明には当てはまるものではなく、例外として、今後の研究課題とする。

以上に述べたように、語彙レベルの逆転現象には言葉の背景となる文化・認識、構造的な原因、更に修飾関係が存在していると考えられる。以下の表 1 にまとめる。

表 1. 語彙レベルの逆転現象の整理

構造別	逆転現象の起こる背景	代表例
並列構造	変遷の経緯、或いは両国の認識の違い。 日本語はメインメッセージが最後に、 中国語はメインメッセージが最初に来る傾向が強い	死生観（ <u>生死观</u> ）
修飾構造	日本語は「修飾語＋動詞」の修飾構造、 中国語は「動詞＋結果」の「動補」構造	短縮（ <u>缩短</u> ）
	日本語は複雑な修飾関係の構造、 中国語は単純な修飾関係の構造	気管支（ <u>支气管</u> ）
OV 構造	日本語は OV 構造、中国語は VO 構造	鉄欠乏（ <u>缺鉄</u> ）性貧血

3. フレーズレベルの逆転

フレーズレベルの逆転現象も語彙レベルのような a. 並列構造 b. 修飾構造 c. 目的語述語構造の 3 種類に分けられる。

a. 並列構造

3 泊 4 日（ <u>四天三夜</u> ）、飲んだり食ったり（ <u>吃吃喝喝</u> ）、売ったり買ったり（ <u>买进卖出</u> ）、需要と供給（ <u>供给和需求</u> ）、分析と研究（ <u>研究和分析</u> ）、同工異曲（ <u>异曲同工</u> ）
--

日本語の「3泊4日（中国語：四天三夜）」は前述した語彙レベルの「夜昼（中国語：昼夜）」と順番が同じく、夜が先、昼は夜の後ろにつく。中国語では、昼が先で夜は昼の後ろにつくという順番である。こういう並列の順番も両国の認識の違いによるものだと考える。メインメッセージの「4日」は日本語では後ろに来るのに対し、中国語では先に来る傾向が強いと筆者が考える。

日本語の「飲んだり食べたり」は時々「食べたり飲んだり」ということもあるが、中国語は基本的に「吃吃喝喝」という順番である。この言葉には中国人の「食べる（吃）」ことは「飲む（喝）」ことより「メインメッセージ」であるという認識が含まれていると考える。

こういう言葉に含まれている認識やロジックは、語彙レベルとフレーズレベルにおいて、一致している例がいくつか見つかったので、以下の表2にまとめる。

表2. 語彙レベルとフレーズレベルにおける逆転現象の一致用例

	語彙レベル	フレーズレベル	一致した認識
1	夜昼（昼夜）	2泊3日（三天二夜）	日本語：「夜」が先 中国語：「昼」が先
2	需給（供需）	需要と供給（供给和需求）	日本語：「需要」が先 中国語：「供給」が先
3	飲食店（餐饮店）	飲んだり食べたり（吃吃喝喝）	日本語：「飲む」が先 中国語：「食べる」が先
4	売買（买卖）	売ったり買ったり（买进卖出）	日本語：「売る」が先 中国語：「買う」が先

以上の例から、日本語は語彙レベルもフレーズレベルも語順が同じく、一貫性があることが分かった。その背景には両言語において、物事に対する認識やロジックに一貫性があるということがある。

b. 修飾構造

- b.1 習近平国家主席（国家主席习近平）、トランプ大統領（总统特朗普）、洪磊副報道局長（新闻司副司长洪磊）、小川容疑者（嫌疑犯小川）、伊藤被告人（被告人伊藤）
b.2 ファンの一部（部分球迷）、武芸十八般（十八般武艺）、全9巻セット（全套9巻）
b.3 渡航の自粛（自行控制出国）、水際対策の強化（加强边境检查）、鯖の塩焼き（盐煎青花鱼）、茄の味噌炒め（味噌酱炒茄子）

「田中課長（中国語も：田中科长）」のように、中国語も日本語も肩書が基本的に名前の後ろにつくが、中国語の場合は、例 b.1 のように「国家主席」や「新闻司副司长」のような特定の場合、肩書をメインメッセージとして強調する意味で、名前の前に肩書を置いていると考えられる。

b.2 のように、日本語では「一部」という言葉が「ファンの一部」でも「一部のファン」でも両方使えるが、中国語では「部分球迷」としか言うことができない。

また、b.3 のように、日本語（「渡航の自粛」）は修飾構造であるが、中国語（自行控制出国）は VO 構造である。これは、日本語と同じ修飾構造（出国的自行控制）にも訳せる

が、実際使う頻度が低く、定着した用語ではない。また、「鯖の塩焼き（盐煎青花鱼）、茄の味噌炒め（味噌酱炒茄子）」はそのままの修飾構造（×茄子的味噌酱炒）には訳せず、VO 構造（味噌酱炒茄子）にしか訳せないのである。従って、日本語の修飾構造が中国語の VO 関係も訳せ、機能性の高い構造であると言える。

c. 目的語・述語 (OV) 構造

c-1. <u>販路開拓</u> （ <u>拓展销路</u> ）、 <u>規制緩和</u> （ <u>放宽管制</u> ）、 <u>回転数制御</u> （ <u>控制转数</u> ）、 <u>負担軽減</u> （ <u>减轻负担</u> ）、 <u>責任放棄</u> （ <u>放弃责任</u> ）、 <u>角質除去</u> （ <u>去角质</u> ）、 <u>静電気除去</u> （ <u>除静电</u> ）、 <u>社会人むけ</u> （ <u>面向社会人员</u> ）、 <u>クラス分け</u> （ <u>分班</u> ）、 <u>代表内定</u> （ <u>选定人选</u> ）、 <u>南瓜煮</u> （ <u>煮南瓜</u> ）、 <u>自身フライ</u> （ <u>炸鱼</u> ）、 <u>学位授与</u> （ <u>授予学位</u> ）、 <u>学生確保</u> （ <u>确保生源</u> ）、 <u>渡航中止</u> （ <u>中止出国</u> ）、 <u>人間観察</u> （ <u>观察人</u> ）、 <u>テレビ離れ</u> （ <u>远离电视</u> ）、 <u>ボケ担当</u> （ <u>负责逗哏</u> ）、 <u>ネズミ駆除</u> （ <u>灭老鼠</u> ）、 <u>ランニングコスト不用</u> （ <u>无需运营成本</u> ） （他多数）
c-2. <u>管理通貨</u> （ <u>货币管理</u> ）制度

前述した語彙レベルの逆転現象と同じく、フレーズレベルも、c-1.のように、OV 構造と VO 構造の違いに起因する例が数多く見つかった。

なお、例外として「管理通貨（货币管理）制度」という上記の説明に当てはまらない用例が存在し、今後の課題として研究を進めたいと思う。

以上に述べたように、フレーズレベルの逆転現象にも認識、修飾性、OV 構造的などの原因が存在する。その原因を構造別で以下の表 3 にまとめる。

表 3. フレーズレベルの逆転現象の整理

構造別	逆転現象の起こる背景	代表例
並列構造	習慣・認識の違い （日本語はメインメッセージが後ろに、 中国語はメインメッセージが先に来る傾向が強い）	3 泊 4 日（四天三夜）
修飾構造	習慣・認識の違い （日本語はメインメッセージが後ろに、 中国語はメインメッセージが先に来る傾向が強い）	習近平国家主席 （国家主席习近平）
	日本語の修飾構造は中国語の VO 構造にも訳せる場合 があり、機能性が高い	渡航の自粛 （自行控制出国）
OV 構造	語順構造の違い （日本語は SOV 構造、中国語は SVO 構造）	販路開拓（拓展销路）

4. 文レベルの逆転

文レベルの逆転現象も多く存在している。以下、文の構造により分類整理する。

a. 述語の構文構造による逆転

例 1：日本語：静岡大学の研究チームが調査結果をまとめた。

中国語：静岡大学的一个研究小组总结了调查结果。

例1のような逆転現象の例は数えきれないほど存在している。なぜなら、日本語はOV構造であるのに対し、中国語はVO構造であり、両言語の語順が逆になっているのである。日本語を中国語に訳す時に、後ろにある述語を一早く前に抽出する必要がある。特に例2のような長い文を訳す場合、逆転現象に対する理解と認識が必須である。

例2：日本語：沖縄県の石垣島で、約2000年前から現在までに巨大津波が計4回起きたことを示す地層の痕跡を発見したという調査結果を、静岡大学の研究チームがまとめた。

中国語：静岡大学的一个研究小组总结了他们的调查结果：他们发现了能证明冲绳石垣岛大约2000年前至今共发生过四次巨型海啸的地层遗迹。

また、目的語の有無にかかわらず、日本語は述語が文末に位置しているという構造的な特徴により、日中両言語において、逆転になっている文型が数多く存在している。例3と同じく、訳す時に逆になっている文型の一部を以下の表4にリストアップした。

例3：中国語：一般情况是不说的。

日本語：言わないのが普通です。

表4. 述語の位置の違いによる逆転文型例

	日本語（中国語）	例文と訳文
1	…の <u>が事実だ</u> 。 (<u>事实情况是</u> …。)	農民の生活が苦しくなったのもまた <u>事実である</u> 。 (<u>事实上农民的生活状况是</u> 进一步下降了。)
2	…の <u>が現状だ</u> 。 (<u>现状是</u> …。)	日本の最低賃金は先進国の中で非常に低く、そして、貧困層に対する社会保障は不十分であるというのが現状です。(現状は日本の最低工资在发达国家中是属于非常低的, 而且对贫困群体的社会保障也不完善。)
3	… <u>構成になっている</u> 。 (<u>流程是</u> : …。)	今回の発表会は、1つの発表が終わるとすぐに審査員からの講評が入る <u>構成になっていました</u> 。 (本次比赛 <u>的流程是</u> 每位选手上场比赛结束后立即进入评委的讲评环节。)
4	… <u>が主流です</u> 。 (<u>主要是</u> …。)	日本の高度成長の時期、結婚相手を職場で見つけ、あるいはお見合いを通じて見つけるのが <u>主流でした</u> 。(在日本经济高度增长期, 人们 <u>主要是在</u> 工作单位或是通过相亲找结婚对象。)
5	… <u>という設定だ</u> (<u>设定是</u> …。) (他多数)	蜷川実花監督の最新作「Diner ダイナー」で演じたカナコも、拉致された揚げ句、無理やり殺し屋専用食堂のウェイトレスをさせられるという <u>設定だ</u> 。(在蜷川实花执导的新作《杀手餐厅》里饰演的加奈子, 其 <u>人物设定也很复杂, 是</u> 被绑架来后被迫在杀手餐厅里做女招待的。)

b. 修飾構造の逆転

例4：中国語：我们要研究和充分运用高科技手段，如卫星通信广播、计算机信息技术和数据处理技术以及电子字典等。

日本語：通信衛星放送、コンピューターを基礎とした情報技術とデータ処理、電子辞書など、高度な技術手段を研究し十分に活用しなくてはならない。

逐語訳すると「高度の技術手段を研究し十分に活用しなくてはならない。例えば、通信衛星放送、コンピューターを基礎とした情報技術とデータ処理、電子辞書など。」になるが、中国語は例を挙げる部分は後ろにあるのに対して、日本語は例を挙げる部分は前にある傾向が強い⁽³⁾。従って、訳す時に例の部分の位置を調節する必要がある。

更に言語の性質から考えると、これが日本語の膠着語という性質に起因していると思う。中国語は孤立語に属し、性質上長い修飾節が付けられない。一方、日本語は膠着語で長い連体修飾語が付けられる。このような性質に従い、連体修飾語として訳せる部分は位置を調整し体言の前に訳すと自然になる。

また、「の」からなる修飾構造の逆転現象の用例も存在している。

例5：日本語：労働者たちは大幅な賃金アップのストライキを行いました。

中国語訳文1：工人们进行了为大幅度提高工资的罢工。

中国語訳文2：工人们进行了罢工，为大幅度提高工资。

このような2通りの訳し方ができる文は、基本的に連体修飾語が短い場合に限る。もし連体修飾語が長い場合や決まった言い回しのある場合、中国語の訳文は独立節として訳し、日本語の訳文は連体修飾語として訳す傾向が強い。例えば、下記の例6は連体修飾語が長いので独立節として訳すしかない。これは、中国語の訳文は連体修飾語として訳すのが不自然だからである。この場合は語順が逆転になる。

例6：日本語：マカオが中国に返還されて15年となる20日、習近平国家主席は、記念式典で演説し、「一国二制度」は、「国の基本政策」で、「どんな困難や挑戦に遭っても、絶対に揺るがない」と強調。

中国語：20日是澳门回归中国的15周年纪念日，习近平主席在纪念仪式上发表演说，强调“一国两制”是中国的根本国策，无论遇到什么困难和挑战，绝不会动摇。

また、経済ニュースでよく耳にする言い回しとして次のような文があるが、対応する中国語の訳文の語順は、定型的に日本語とは逆の構造になる。

例7：日本語：29日東京株式市場終値は460円39銭高の1万4,466円16銭です。

中国語：29日东京股市收盘价为14466.16日元，比上一交易日上涨460.39日元。

以上の例はいずれも日本語の膠着語の性質によるもので、連体修飾語が多用されたり、中国語には見られない長い連体修飾語が使用されたりすることによって、訳す際に語順の

逆転調整が必要となるのである。

c. 従属節と並列節の逆転

例 8：中国語：你大声讲，好让大家都能听到。

日本語：みんなに聞こえるように、大きな声で話してください。

例 9：中国語：保重身体，别感冒了。

日本語：風邪を引かないようにお気を付けてください。

例 8、9のように、中国語ではその指令を明確化させるため、指令文を文の前に置く。目的や説明などは補足として後ろに付け加えるのである。それに対し、日本語は相手に対する指令は最後に来る傾向が強い。

例 8、9は従属節の例であるが、以下例 10は並列節の逆転の例である。

例 10：中国語：美国的教育是教学生获取信息的能力，而不是要学生记忆信息。

日本語：米国の教育は、学生に情報を覚えさせるのではなく、情報を得る能力を身に付けさせることである。

中国語の言い回しは「是…、不是…」のに対し、日本語の言い回しは「…のではなく、…である」。これは言語の習慣であるが、その背景には、中国語はメインメッセージが文頭に位置し、日本語はメインメッセージが文末に位置しているというロジックが存在していると考えられる。

また、上記の例 7 を、語彙レベルとフレーズレベルで述べた「メインメッセージ」の考え方で考えると、日本語はメインメッセージの「終値 1 万 4,466 円 16 銭」が最後に来るのに対し、中国語はメインメッセージの「收盘价为 14466.16 日元」が最初に来る。こういう中国語のメインメッセージが最初に来る傾向が強く、日本語のメインメッセージが最後に来る傾向が強いというロジックは、語彙レベル、フレーズレベル、文レベルで共通していると言える。

これらの例のように、日中両言語における文レベルの逆転現象は広く存在している。以上整理した文レベルの逆転現象について、その背後にある原因を以下の表 5 にまとめる。

表5. 文レベルの逆転現象の整理

構造別	逆転現象の起こる背景	代表例
従属節と並列節	習慣・認識の違い。 (日本語はメインメッセージが文末に、中国語はメインメッセージが文頭に来る傾向が強い)	風邪を引かないように <u>お気をつけてください</u> 。(保重身体, 别感冒了。) …ではなく…である(是…不是…)
長い連体修飾語	習慣・認識の違い (日本語はメインメッセージが文末に、中国語はメインメッセージが文頭に来る傾向が強い)	29日東京株式市場終値は460円39銭高の <u>1万4,466円16銭</u> です。 (29日东京股市收盘价为 <u>14466.16日元</u> , 比上一交易日上涨460.39日元。)
	言語の性質 (中国語は孤立語、日本語は膠着語)	<u>マカオが中国に返還されて15年となる20日</u> 、習近平国家主席は…。 (20日是澳门回归中国的15周年纪念日, 习近平主席…。)
述語	語順構造の違い (日本語はSOV構造、中国語はSVO構造)	静岡大学の研究チームが <u>調査結果をまとめた</u> 。(静岡大学的一个研究小组总结了调查结果。)

5. まとめ

本稿は翻訳・通訳の視点で、日中両言語における語順の逆転現象について整理し、その原因を述べた。

そして、語彙レベル、フレーズレベル、文レベルのあらゆるレベルに逆転現象が存在していることを検証した。

更に、レベルが違っていても、逆転現象の裏にある原因は共通していることが分かった。各レベルの逆転現象の共通した原因は以下の表6のように整理できる。

表6. 各レベルの逆転現象の共通した原因

	語順構造の違い	言語の性質	習慣・認識の違い
日本語	OV	膠着語	メインメッセージが最後に
中国語	VO	孤立語	メインメッセージが最初に

注

(1) <http://www.kakuoanjin.com/life/>

(2) 人民網日本語版 中日フォーカス

<http://j.people.com.cn/n3/2017/0426/c94473-9208028-2.html>

(3) 何午. 日本語の統語構造認知—中国語の対照を兼ねる[M]. 大連理工大学出版社, 2013.

参考文献

金田一春彦. 李徳 (訳). 日語的特点[M]. 外語教学与研究出版社, 1985.

張力. 浅析中日二字逆序詞[J]. 「科学時代」, 2011(20).

何午. 日本語の統語構造認知—中国語の対照を兼ねる[M]. 大連理工大学出版社, 2013.

吳大綱. 漢訳日翻訳語法学[M]. 華東理工大学出版社, 2014.

The Effects of Parent's Behavior toward Preschool Children on Delay of Gratification in Children

A Pilot Study

幼児に対する親の行動が幼児の満足遅延行動に及ぼす効果

Takashi Mitsutomi

光富 隆

要旨

本研究の第一の目的は年齢と性別が幼児期の間のパーソナルな遅延行動（パーソナルな状況の中で即座の満足を遅延する能力）とソーシャルな遅延行動（ソーシャルな状況の中で即座の満足を遅延する能力）に及ぼす効果を検討することであった。加えて、幼児の遅延行動（パーソナルな遅延行動とソーシャルな遅延行動）と彼らの子どもに対する親の行動の関係が検討された。特に、子どもとの約束を守る傾向、親によって示されるしつけの頻度、彼らの子どもに対する親の優しさの度合い、そして親によって示される遅延行動の頻度。幼児は年少のクラスと年長のクラスに分類され、本研究の参加者となった。パーソナルな満足遅延テストは3つの報酬対を含んだ。被験者はすぐに入手できる価値の低い報酬と次の日に得られるより価値ある報酬の間で選択するように教示された。ソーシャルな満足遅延テストは社会的な状況で即座の満足を遅延する能力を測定する8項目からなった。クラス担任の先生がテストに応答した。子どもに対する親の行動を測定するスケールが考案され、幼児の親に実施された。この研究は小さなサンプルを用いたパイロット研究であった。本研究の発見はパーソナルな遅延行動とソーシャルな遅延行動は幼児期に発達すること、子どもとの約束を守ること、そして子どもに優しく接しないことがそれぞれ年長児のソーシャルな遅延行動の発達に、そして女兒のソーシャルな遅延行動の発達に重要な役割を果たすことを示した。

キーワード： 満足の遅延、ソーシャルな満足の遅延、パーソナルな満足の遅延、
子どもに対する親の行動、幼児

The first purpose of the present study was to investigate the effects of age and gender on personal delayed behavior (i.e., the ability to delay immediate gratification in personal situations) and social delayed behavior (i.e., the ability to delay immediate gratification in social situations) during early childhood. In addition, this study aimed to investigate the relationship between preschool children's delayed behaviors (personal delayed and social delayed behaviors) and parents' behavior toward their preschool children. Specifically, the tendency to keep promises to children; the frequency of discipline displayed by parents; the degree of parental tenderness toward their children; and the frequency of delayed behavior displayed by parents. Preschool children were divided into an older and younger class and served as the participants for the present study. The personal delay of gratification test included three reward pairs. Subjects were instructed to choose between a less valuable reward which was immediately available and a more valuable reward which would be received the following day. The social delay of gratification test consisted of eight items that measured the ability to delay immediate gratification in a social situation. Teachers in charge of the class were asked to respond to the test. A scale that measured the parents' behavior towards their preschool children was devised and administered to the parents of the preschool children. This study was pilot study that used the small sample. The present study's finding may suggest that personal and social delayed behaviors develop during early childhood and that keeping promises to children and not conducting tenderly for a child played an important role in the development of social delayed behavior in the older group of preschool children and the development of social delayed behavior of girls, respectively.

Key words: delay of gratification, social delay of gratification, personal delay of gratification, parent's behavior towards child, preschool children.

It is impractical to immediately and directly translate one's desires, urges and impulses into action. Often, behaviors that would be the most immediately gratifying are prohibited by a higher authority or society at large. The developing child must simply learn to wait for rewards that may indeed be forthcoming, but often only after a delay. The ability to delay immediate gratification is integral to developing social abilities (Funder, Block & Block, 1983).

This ability is referred to as delay of gratification and has received a good deal of attention from researchers, including Mischel (1966, 1974) and his colleagues. Their studies have typically employed a paradigm in which subjects are confronted with

situations to make choices between immediately available but less valued rewards, as opposed to delayed but more valuable options. Mischel (1974) argued that the choice of delayed rewards is conceptualized as the ability to overcome the desire for immediate gratification.

In the delay of gratification paradigm proposed by Mischel (1966), failure to delay gratification resulted in the renunciation of obtaining the delayed reward and the individual suffered loss through the failure to delay gratification. We refer to this paradigm as the renunciation type paradigm and refer to delay of gratification measured in this paradigm as personal delay of gratification.

However, delay of gratification includes more than the renunciation type paradigm. In daily life, there are situations in which delay of gratification is a social norm. For example, there is a situation where a person must wait for their turn. In this situation, the failure to delay the gratification results in rule breaking. We refer to this paradigm as a transgression type paradigm and refer to delay of gratification measured in this paradigm as social delay of gratification.

Previous research has particularly focused on the developmental changes associated with the ability to delay personal gratification. Melikan (1959) presented Arab children, aged 5-10 years, with the choice between 2.5 cents that was immediately available or 5 cents to be awarded 2 days later and found that a major shift to a preponderance of delayed reward choices occurred at 6 years of age.

While Mischel and Metzner (1962), using delay intervals ranking from one day to four weeks and the choice between a small or large candy bar, located the major shift at 8.5 to 9 years of age. Nisan (1974) instructed children aged 6, 7, 8 and 9 years old to choose between an immediate reward and a delayed larger reward. Half of the children in each age group saw the rewards before choosing, while the other half did not. The results indicated that a major shift to a preponderance of delayed reward choices occurred at 7 years of age under that reward situation.

Taken together, these studies suggested that there is variation in the age at which a major shift of delayed reward choice occurs. However, the results from these studies consistently showed that preference for delayed reward is positively related to age.

These previous studies employed participants who ranged in age from kindergarten to elementary school. Considering Furhata's outlook that self-regulated behavior develops remarkably during early childhood, it is necessary to investigate the developmental changes associated with delay of gratification during early childhood.

The aforementioned studies also focused on personal delay of gratification. However, it is also important to investigate the developmental changes associated with the ability

to delay immediate gratification in social situations, i.e., social delay of gratification.

Kobayashi and Mitsutomi (2009) investigated the developmental changes associated with personal and social delay of gratification during early childhood. Additionally, they also examined gender differences in personal and social delay of gratification (Kobayashi & Mitsutomi, 2009).

Kindergarteners registered in an older class (aged 5-6 years old), middle class (aged 4-5 years old) and a younger class (aged 3-4 years old) participated in the present study. The personal delay of gratification test included three reward pairs. Subjects were instructed to choose between a less valuable reward which was immediately available and a more valuable reward which would be made available the following day. The social delay of gratification test consisted of eight items which measure the ability to delay immediate gratification in social situations. Teachers in charge of the class responded to those items.

The results indicated that developmental changes in the ability for personal delay of gratification were observed in girls and that older and younger groups had a higher ability to delay personal gratification compared to the middle age group of preschoolers. These findings suggested that the ability to delay personal gratification may be formed during the first stage of early childhood. However, this ability decreases from the first stage of development to the second stage and increases again from the second stage to the third stage.

In contrast, the developmental changes associated with social delay of gratification were not observed. Results demonstrated that girls had a higher ability for social delay of gratification for all age groups when compared to boys. The personal delay of gratification ability was also higher for girls than for boys in the younger and older groups.

The girls might be more strictly trained to self-regulate behavior than boys. Thus, the gender difference in personal and social delay of gratification might be observed. No relationship was observed between the ability for personal and social delay of gratification. This finding may suggest that the tests for personal and social delay of gratification may be measuring different aspects of the ability to delay gratification.

The first purpose of the present study was to replicate the findings from Kobayashi and Mitsutomi (2009). The second purpose was to investigate the relationship between preschool children's delay of gratification and parent's behavior towards their preschool children.

One parental behavior that was considered was the tendency to keep a promise to their children. Mischel and Grusec (1967) indicated that children were more likely to

choose a delayed reward more frequently when there was high expectancy that the delayed reward choice would lead to obtaining a reward. Mahrer (1956) also found that children chose a delayed reward more frequently when the experimenter kept their promise than when the experimenter broke their promise.

Therefore based on previous findings, it is predicted that preschool children who have parents who keep their promises would display the personal and social delayed behaviors more frequently than children who have parents who break their promises.

The second parental behavior considered was the degree of tenderness that parents displayed for their preschool children. A parent's tenderness brightens the child's future outlook and helps to develop and form future oriented behaviors such as, waiting behaviors (Klineberg, 1968).

Therefore, it was predicted that children of parents who display a higher degree of tenderness would display personal and social delay behaviors more frequently than children of parents who display a lower degree of tenderness for their children.

The third parental behavior was the degree of discipline used by the parent. Children might develop future oriented behaviors such as, waiting behavior through the discipline conducted during their socialization process.

Therefore, it was predicted that the children with parents who frequently used discipline would more likely demonstrate personal and social delayed behaviors when compared to children with parents who did not. The fourth parental behavior was the frequency of delay behavior displayed by the parents. Previous research on observational learning indicated that when children observed modeled behavior, they imitate it. That is, children who observed a role model who frequently chose to delay rewards also more frequently chose to delay rewards when compared to children who did not observe a role model who frequently chose delayed rewards (Bandura & Mischel, 1965, Staub, 1972).

Thus, it was predicted that children of parents who frequently display delayed behavior would perform personal and social delay behavior more frequently than children of parents who did not display delayed behavior. The second purpose of the present study was to measure parental behavior towards their preschool child. Specifically, the 1) tendency to keep promises, 2) degree of tenderness displayed by the parent for the child, 3) degree of discipline displayed by the parent, and 4) frequency of delay behavior displayed by the parent. We then investigated the relationship between parent's behavior and personal and social delayed behaviors displayed by their preschool children. The present study was the pilot study that used the small sample.

Method

Subjects Preschool children registered in an older class (aged 5-6 years), a middle class (aged 4-5 years old), a younger class (aged 3-4 years old) and a toddler class (aged less than 3 years old) served as subjects.

The older class was combined with the middle class and was designated to be the older class. We also combined the younger class with the toddler class and referred to this group as the younger group. There were 33 children (13 boys , and 20 girls) in the younger group and 35 children (18 boys, 17 girls) in the older group.

Procedure

Table 1 The parent's behavior inventory

Promise
1. You always keep the promise to the child. 2. You treat the promise to the child lightly and it slips your memory. 3. You apologize to child when you do not keep the promise.
Tenderness
4. You always listen when the child is talking. 5. You spend holidays with the child as much as possible. 6. You take labor and time, and make a lunch when the child needs a lunch. 7. When the good things happen to your child, you enjoy those moments with child. 8. You read a picture book with your child.
Discipline
9. You punish your child when the child behaves badly. 10. You always encourage your child with praise when the child does good things. 11. Before you go to bed, you help your child get ready for the tomorrow. 12. You teach a child to put things in order after child is done playing. 13. You have child practice patience at the necessary time. 14. You teach your child, "think become like this if you do, so you must not do. ".

Parent's delayed behavior

-
15. When the child wears the clothes by oneself, you can respect the child's independency and watch over the child even if the child takes time.
 16. You keep a signal.
 17. You wait for one's turn in the bus stop and the street care terminal.
 18. After you put the things in order, you do the things that you want to do.
 19. You are impatient.
-

The parent's behavior scale was devised. This scale includes four subscales. The first subscale measures the tendency for a parent to keep promises to their child and consisted of three items. The second subscale measured the degree of parental tenderness toward their child and consisted of five items.

The third subscale measured the frequency of discipline displayed by the parent and consisted of six items. The fourth subscale measured the frequency of the parent's own delay behaviors and consisted of five items. The parents responded to the four subscales, using a five-point scale.

The experiment was conducted in a large room located in the preschool. The subjects were brought into the room in groups of three and six. Each group was accompanied by a female experimenter. The subject-experimenter pairs sat down on the floor, with a sufficient distance between one another so that the children could not hear each other.

The personal delay of gratification test was based on the delay of gratification test devised by Mischel (1966). A series of three different pairs of reward items (the rewards within each pair differed only in quantity) were set. Objects popular with preschool children were offered: an eraser, a sticker and a coloring book.

Each pair was presented separately on the floor. For each of the pairs, the subjects were asked to select either a less preferred reward that could be obtained immediately or a more preferred reward that would be available the following day.

For all reward pairs, there were three delayed rewards and one immediate reward. The pairs were randomly presented for all subjects. The number of delayed preferences for each subject was recorded and summed to create a total score of delay of gratification choices.

Eight items that described delay of gratification in social situations were used in the social delay of gratification scale. These were selected from the self-regulated scale devised by Kashiwagi (1992). This scale is shown in Table 2. The teacher in charge of the class rated the preschool children's ability to delay gratification in social situations,

using a five-point scale.

Table 2 Social delay of gratification test

-
1. The child can wait when instructed to wait a minute..
 2. The child immediately robs the toy from a friend when he or she wants it.
 3. The child can wait for a turn in the play.
 4. The child can play on the swing or slide in turn or exchange with other child.
 5. The child can wait for the midafternoon snack to be distributed.
 6. The child can wait to speak to the teacher when other child is speaking.
 7. The child can wait for a turn when a large crowd of children are either speaking or discussing.
 8. The child can wait when instructed to do something later.
-

Results

In the personal delay of gratification test, we obtained and analyzed data from all subjects. Table 3 presents the mean personal delay scores for boys and girls for each age group. Using the personal delay scores as the dependent variable, a 2 (age) \times 2 (gender) ANOVA was performed. The main effect for age ($F = 3.12$, $df = 1/64$, $p = 0.08$) and the interaction effect between age and gender ($F = 2.95$, $df = 1/64$, $p = 0.09$) approached significance.

Table 3 The mean personal delay scores for each group

Younger group		Older group	
Boys	Girls	Boys	Girls
1.15	0.65	1.16	1.59

First, the simple main effects for age were analyzed for boys and girls. The results indicated that the simple main effect for age was significant for girls ($F = 6.08$, $df = 1/64$, $p < 0.05$) and that the older group had higher personal delay scores when compared to the younger group. Finally, the simple main effect for gender was analyzed for each age group. Results indicated that there were no significant main effects for gender within each age group.

Of the subjects who participated in the personal delay of gratification test, we could not obtain the data from four younger children (3 boys, 1 girl) and two older children (1 boy, 1 girl) for the social delay of gratification test. Therefore, 29 younger children (10 boys, 19 girls) and 33 older children (17 boys, 16 girls) were included in the following analyses.

Table 4 The mean social delay scores for each group

Younger group		Older group	
Boys	Girls	Boys	Girls
28.8	28.84	33.53	37.25

Table 4 presents mean social delay scores for boys and girls within each age group. Using the social delay scores as the dependent variable, a 2 (age) \times 2 (gender) ANOVA was performed. The main effect of age was significant ($F = 23.07$, $df = 1/58$, $p < 0.01$) and the older group had the higher social delay scores than the younger group.

When examining the relationship between personal and social delay scores, a significant correlation was not found when we included both age and gender in the analyses ($r = 0.20$).

Correlation coefficients between personal delay scores and social delay scores were calculated for each age group. However, significant correlations were not observed for either age group (younger group: $r = -0.00$, older group: $r = 0.18$).

Finally, the correlation coefficients between personal delay scores and social delay scores were calculated for boys and girls. Again, no significant correlations were found for either boys or girls (boys: $r = 0.18$, girls: $r = 0.22$).

Factor analyses were performed on the parents' behavior scale items. A four-factor solution, using principal factor analysis with varimax rotation, yielded the most conceptually and empirically interpretable set of factors. Subscales derived from factor analysis and factor loading for the items are presented in Table 5. Items displaying a factor loading of less than .40 within any factor were excluded.

Table 5 Results of factor analysis

	I	II	III	IV
You always listen when the child is talking.	.60	-.09	.12	.07
You always keep promise to the child.	.74	-.13	-.12	.07
You treat the promise to the child lightly and it slips your memory.	-.46	.20	-.22	.02
You apologize to the child when you do not keep the promise.	.60	.31	.33	.05
You wait your turn at the buss stop and at the street care terminal.	.24	.47	.23	-.09
You always encourage your child with praise when the child does good things.	-.07	.42	-.11	.00
Before you go to bed, you help your child get ready for tommorow.	-.23	.40	.38	.37
You punish your child when the child behaves badly.	.18	.69	.07	.18
You teach your child to put things in order after he/she is done playing.	.08	.60	-.01	-.00
You read a picture book with your child.	-.03	-.12	.68	-.08
You spend holidays with the child as much as possible.	.06	.16	.49	-.32
You teach your child, “things become like this if you do, so you must not do. “	.28	.15	.41	.13
When the goods things happen to your child, you enjoy those moments with the child.	.27	.20	.12	.57
After you put things in order, you do the things that you want to do.	-.07	-.34	.27	-.47

Factors 1 was designated as making promises and Factor 2 was discipline. Factor 3 assessed tenderness and Factor 4 measured a child centered principal.

First, the relationships between personal delayed behavior in preschool children and parents' behavior towards children were analyzed. In analyzing this relationship, 12 younger children (5 boys, 7 girls) and 18 older children (12 boys, 6 girls) had complete data for the two tests.

We combined the data from the boys with data from the girls and calculated the correlation coefficients between personal delay scores and the four parental behavior scores within each age group. The results are shown in Tables 6 and 7. No significant relationships were found within either age group for all four parental behavior subscales (see Tables 6 and 7).

Table 6 The correlation coefficients between two delay scores and four parents' behavior scores (younger group)

	Personal delay scores	Social delay scores
Promise scores	-.19	-.34
Discipline scores	-.25	-.22
Affection scores	-.06	-.40
Child centered principal Scores	.08	.23

Table 7 The correlation coefficients between two delay scores and four parents' behavior scores (older group)

	Personal delay scores	Social delay scores
Promise scores	-.02	.43+
Discipline scores	.30	-.32
Affection scores	.19	-.00
Child centered principal Scores	.15	-.20

Furthermore, we combined the data from the younger group with data from the older group and calculated the correlation coefficients between personal delay scores and parental behavior scores within each gender group. The results are shown in Tables 8 and 9. As shown in Tables 8 and 9, no significant correlations were found in boys or girls for all four parental behavior subscales.

Table 8 The correlation coefficients between two delay scores and four parents' behavior scores (boy)

scores	(boy)	
	Personal delay scores	Social delay scores
Promise scores	-.02	.10
Discipline scores	.09	-.21
Affection scores	.19	.14
Child centered principal Scores	-.10	-.30

Table 9 The correlation coefficients between two delay scores and four parents' behavior scores (girl)

scores	(girl)	
	Personal delay scores	Social delay scores
Promise scores	-.32	-.19
Discipline scores	.05	-.27
Affection scores	-.06	-.49+
Child centered principal Scores	.28	-.13

We also created four groups across age and gender combined into one and calculated the correlation coefficients between personal delay scores and all four parental behavior scores. As shown in Table 10, a significant correlation coefficient was not obtained for parental behavior scores.

Table10 The correlation coefficients between two delay scores and four parents' behavior scores (total)

scores	(total)	
	Personal delay scores	Social delay scores
Promise scores	-.11	-.02
Discipline scores	.08	-.24
Affection scores	.08	-.18
Child centered principal Scores	.07	-.20

Finally, the relationship between social delayed behavior in preschool children and parents' behavior toward their children were analyzed. In analyzing this relationship, 12 younger children (5 boys, 7 girls) and 18 older children (12 boys, 6 girls) had complete data for the two tests and were included in the present analyses.

Additionally, we combined data from the boys with data from the girls and the correlation coefficients for social delay scores for the preschool children and parental behavior scores were calculated for each age group. These results are shown in Tables 6 and 7. As shown in Table 7, the positive correlation coefficient between social delay scores and scores from the promises subscale approached significance, but only within the older group. Correlation between social delay scores and promise scores for older boys and older girls group were similar to the total older group to some degree.

Furthermore, we combined the data from the older group with data from the younger group and calculated correlation coefficients between social delay scores and parents' behavior scores for each gender group. These results are presented in Tables 8 and 9. As shown in Table 9, the negative correlation coefficients between the social delay scores and tenderness scores approached significance for the girls group. Correlation between social delay scores and tenderness scores for the older girls and the younger girls were similar to the total girls group to some degree.

Additionally, we created four groups and combined groups across age and gender into one and calculated correlation coefficients for social delay scores with the four parental behavior scores. These results are shown in Table 10. As shown in Table 10, no significant correlations were found between social delay scores and the four parental behavior scores.

Discussion

The development of personal delay of gratification during early childhood was observed for girls. Additionally, an older group of preschool children had higher personal delay scores when compared to a younger group. These results are related to developmental changes that occur in children as they learn and grow.

In contrast, Kobayashi and Mitsutomi (2009) found age affected personal delay of gratification for girls; also younger and older groups had higher personal delay scores than the middle group of preschoolers. Thus, the effect of age on personal delay of gratification according to Kobayashi and Mitsutomi (2009) was different from the present study's findings.

However, the subjects' ages were different in the Kobayashi and Mitsutomi (2009) study. The older group used in the present study was equivalent to a combination of the

older group and middle age group used by Kobayashi and Mitsutomi (2009). The younger group used in the present study was equivalent to a combination of a younger group used in the Kobayashi and Mitsutomi (2009) study and toddler group.

Therefore, we may not be able to generally compare the results from the present study with that of Kobayashi and Mitsutomi (2009). Thus, it is necessary to investigate the effects of age on delay of gratification ability during early childhood in greater detail, and include and assess preschool children at various ages.

Also, gender differences were observed in Kobayashi and Mitsutomi (2009) where girls scored higher than boys on personal delay of gratification. However, gender differences in personal delay of gratification were not observed in the present study. Further research is needed to better understand these inconsistent results.

The effects of age on social delay of gratification during early childhood were observed and social delay scores were higher for the older group than the younger group. However, the effects of age on social delay of gratification during early childhood were not observed in the Kobayashi and Mitsutomi (2009) study. As described above, subjects' ages were different in Kobayashi and Mitsutomi (2009). Therefore, a direct comparison between the present study's findings and that of Kobayashi and Mitsutomi (2009) may not be possible. Thus, it may be necessary to include preschool children at various ages and investigate the effect of age on social delay of gratification during early childhood in greater detail.

Gender differences in social delay of gratification were observed in the Kobayashi and Mitsutomi (2009) study where girls scored higher on social delay scores than boys. This suggested that the girls might be more strictly trained to self-regulate one's behavior more strictly than boys. However, there were no gender differences in social delay of gratification in the present study. Further research is needed to better understand these inconsistent results.

In the present study, personal delay scores did not correlate with social delay scores. These results were consistent with that of Kobayashi and Mitsutomi (2009). Personal delay of gratification test and social delay of gratification test may be measuring different aspects of delay of gratification. That is, personal delay of gratification test might measure personal goal oriented behavior; whereas social delay of gratification test measures the ability to delay immediate gratification in social situations.

The second purpose of the present study was to investigate the relationship between parental behavior towards their preschool children and personal and social delayed behaviors displayed by children.

It was predicted that children who had parents that kept their promises would

more frequently display personal and social delayed behavior than children who have parents who break their promises. Looking at the result, positive correlation coefficients between the promise subscale scores and social delay scores were observed for the only older group. Thus, the hypothesis was partially supported.

This result might be interpreted as follows. The younger group of children may not have yet developed the capacity to inhibit their impulsive behavior. Therefore, children might not display social delayed behavior.

However, the older group of preschool children might develop the capacity to inhibit their impulsive behavior. Then, they might trust with the others and display social delayed behavior when parents keep their promises with their children. However, the older group of preschool children that can inhibit their impulsive behavior might not trust with the others and not display the social delayed behavior when the parent does not keep their promise with their child. Thus, keeping the promise with the child might play an important role in their development of the social delayed behavior of the older group.

It was also predicted that children with parents who conduct more tenderly for their child would also display personal and social delayed behaviors more frequently. The negative correlation coefficient between parent's attitude that conduct tenderly for their child and social delay of child were also observed but only for girls. Thus, the hypothesis was not supported.

These findings may be interpreted as follows: Girls may develop stronger ego strength when their parents did not conduct tenderly for their child. Thus, not conducting tenderly for their child may play an important role in the development of social delayed behavior, especially in the case of girls.

In the case of boys, the relationship between not conducting tenderly for the child and social delay behavior of preschool children was not observed. Further research is needed better to understand this result.

It was predicated that children who have parents who displayed a high degree of discipline would also more frequently display personal and social delayed behaviors. However, this hypothesis was not supported. Further research is needed to better understand the result of the present study.

It was predicated that children who have parents who display delayed behaviors more frequently would also display personal and social delayed behaviors more frequently. Looking at the results concerning the factor analysis of the parental behavior scale, a concrete factor structure for parents' delayed behaviors was not extracted. Thus, additional research is needed to investigate the validity of this

hypothesis.

In the present study, the correlation coefficients between the four parental behavioral scores and personal delay scores were not observed. This result might be interpreted as follows. Personal delayed behaviors may be one that is not frequently observed during daily life. Conversely, parents' behavioral scale measures the interaction between parents and children which occur frequently in daily life. Therefore, the relationship might not be observed between the parents' behavioral scale which measures the interaction between parents and children which may frequently occur during daily life settings or personal delayed behaviors measured within experimental situations that may not occur in daily life.

In conclusion, it might be suggested that personal and social delayed behaviors develop during early childhood and that social agent had better keeping promises to children and not conducting tenderly with child in promoting the development of socially delayed behaviors for the older group of preschool children and the development of socially delayed behavior in girls, respectively.

The present study was the pilot study that used the small sample. Further research is needed to conduct the research that used the large sample.

References

- Bandura, A., & Mischel, W. (1965). Modification of self-imposed delay of reward through exposure to live and symbolic models. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 698-705.
- Funder, D. C., Block, J.H., & Block, J. (1983). Delay of gratification: some longitudinal personality correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 1198-1213.
- Klineberg, S., L. (1968). Future time perspective and the preference for delayed reward. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 253-257.
- Kobayashi, S., & Mitsutomi, T. (2009). A developmental study on delay of gratification. 2, 85-101.
- Mahrer, A.R. (1956). The role of expectancy in delayed reinforcement. *Journal of Experimental Psychology*, 52, 101-105.
- Mischel, W. (1966). Research and theory on delay of gratification. In B. A. Maher (Ed.), *Progress in Experimental Personality Research*, Vol.2. New York: Academic Press.
- Mischel, W. (1974). Processes in Delay of Gratification. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol.7. New York: Academic

Press.

- Mischel, W., & Grusec, J. (1967). Waiting for rewards and punishment: Effects of time and probability on choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 24-31.
- Mischel, W. & Metzner, R. (1962). Preference for delayed reward as a function of age, intelligence, and length of delay interval. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64, 425-431.
- Nisan, M. (1974). Exposure to rewards and the delay of gratification. *Developmental Psychology*, 10, 376-380.
- Staub, E. (1972). Effects of persuasion and modeling on delay of gratification. *Developmental Psychology*, 6, 166-177.